

---

# 幻想を抱いた星達

漢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想を抱いた星達

### 【Nコード】

N6274X

### 【作者名】

漢

### 【あらすじ】

金色の髪をしていて、赤黒い肌をしていて、身長は低くも、大きな憎しみを持った男の物語。

ゲーム ファンタシースター2を元にした話で、刑務所から出て来るところから物語りは始まります  
ファンタシースター2の外側からの視点で、外伝というには元に沿って  
いて  
そのままというにはあまりにもストーリーが違うというあやふやな  
作品ですが  
どうぞ見てやってください

更新は二日ごとになります。

## 人を憎む獣人（前書き）

初めての投稿。ちょい緊張…

どうかあたたかい目で見てやってください。

ちよつとどころかかなり手直ししました…

## 人を憎む獣人

「もう戻ってくるなよ」

刑務所の門の前に立っている警官のありきたりな台詞

大抵の罪人は『お世話になりました』や『有難うございました』など  
と

感謝しながら出て行く、だがこの男は。

4

「……………」

何も言わず、ただその猫のような鋭い真っ白な目で警官を睨みつけた。

金色の髪の色をし、赤黒い肌をしていて、身長は130位の小学生

の様だが、その男の目は憎しみが込められた、恐ろしい目をしていた。

睨み付けられたその警官はその後その男が視界から消えるまで何も出来ずに身震いを起こしていた。

「憎い…人間が憎い…」

時は2199年。このグラール太陽系には、パルム、モトウブウ、ニューデイズ。それから地球がある。

パルムは、キャストが統治する惑星で、元々豊かな自然を誇る星だったが、ある大戦により自然が失われた星。

モトウブウは、豊かな資源を有する惑星で自然環境は非常に厳しく、地表のほとんどの部分が砂漠で覆われている星。

ニューデイズは、水と自然に恵まれた惑星で、超巨大宗教『グラール教』に基づいた宗教国家として成り立っている。

そして地球。およそ50億年前以上からある、一番歴史が深い惑星で、様々な大陸があり、その大陸ごとに、言語も違う変わった星だ。

そしてこの地球にはヒトが多く住んでいる

ヒトの技術によって、グラール太陽系は大きく進化した。

遺伝子を組み替えて新たなヒト。『ニューマン』 新人 を創り上げた。

ニューマンはヒトよりも脳の発達が早くまた、吸収も早いいため、ヒトには出来ない計算や開発をしている。主に、ニューデイズに生息。

もう一つの人種。『ビースト』 獣人 を創り上げた。

ビーストは、ニューマンとは対照的に、筋肉の発達が早く、また厳しい自然環境の適応能力も持っている。モトウブウで働かせる奴隷として創りだされた。

それだけでは飽き足らず、『キャスト』 機械人間 を造り出し、ヒトのアシスト、サポートをさせている。そのキャストはパルムに生息している。

そんなとてもヒトに便利になった地球で、途方に暮れている男がいた。

「…これからどうすっかなあ〜」

刑務所を出て行く当てのない猫の様な目をした男が大きな道を歩いていた

車などは空を飛び道にはヒトなどしか歩いてはいなかった。そんな地球がこの男は大嫌いだった。

「チツ、なんて胸糞悪いんだ、どこ見ても人間ばっかじゃねえか」

そういうと男は周りに威圧的なオーラを放ちながら人気の少ない小さな公園に行った

「ここなら人間もいねえし、ゆっくりできるか」

男はベンチに仰向けになり、足を組みながら日向ぼっこを楽しんでる

ヒトの声も、空飛ぶ車の音も何も聞こえない、聞こえるのは風のみ。

少し眠たくなってきた、ここらで昼寝でもしようかとリラックスをした

しかし

静かな空間に砂を踏む音がした

誰かが公園に来たのだ

「おい」

声をかけたのは一人の青年。青年の周りには3・4人の青年がいる。

この匂い…人間か

ゆっくり男は、寝たまま目を開ける。

「ここは俺たちのたまり場だ、消えなおちビちゃん」

男の姿から、青年は、完全に子ども扱いをしていた。

ブチン

男の何かが切れる音がした

「おい聞いてんのかチビ！どけて言ってる…」

青年は言葉を言い終える前に姿を消した。

周りの青年はこれでもかと驚き、辺りを探した。

「あ…」

一人の青年が空に指をさした。その指を追うように空を見上げた

「嘘…」

一人の青年が口を開いた瞬間、鈍い音が数回、静かな公園に響いた。

バタバタと倒れる音がして、遅れてドンっ！と大きな音がした

まだ意識がある青年に睨み付けながら

「俺は人間が大嫌いなんだ、だからお前の仲間にこう言っとけ、

『キング』って男を見たらそこからすぐに消えろってな。気分が悪  
いったりゃありゃしねえ」

そう言つと男は舌打ちをしながらどこかに消えていった

人を憎む獣人（後書き）

初めてでどうしたらいいか分からず時間掛けまくってこの少女を...  
もっと頑張らないと

アドバイスなどがあるととても嬉しいです

## 仕事（前書き）

書くのがたのしいのでバンバン書きまくるつとおもいます！

## 仕事

ぐううう…

「は、腹減った…」

キングが腹を空かしながら人気の無い道を歩いていた

「……………」

財布を見てもスツカラカン何も買うことが出来ずにいる。

「腹がへったつつつてんだろうがあああああ！」

いきなり近くにあった古くなった鉄の塊に八つ当たりをした

周りの野良猫が凄い顔をしてキングを見ている。

「…スマネいきなり悪かったな」

謝りながら猫の頭をなでた、猫もニャーと鳴いてどこかにいった。

怖かったのか、許したのかと考えていたら、後ろから男に話かけられた。

「なあ」

人間の声だ、しかし人間の臭いがしない、不思議に思いながら瞬時に戦闘の構えをとった。

「ちよっ…まて！なんで構える！？襲うためにこえ掛けたんじゃな  
いって！」

その男はキャストだった、ナルホドとキングは頭の中で勝手に納得して構えを戻した

「ふう、全く、君の動きには一つ一つ驚かされるな」

「…？」

「ああ、すまない、さっきの喧嘩、見させてもらったぞ」

さっきの喧嘩とは物の数秒で青年達をノックアウトさせた喧嘩だ、それが何だと男に問いかけた、しかし男は話を聞かずにしゃべり続

けた

「喧嘩の仕方もそうだが、君の動き一つ一つが面白い」

「おい…きいてんのか？」

「いきなり鉄の塊を蹴り飛ばすわ、猫に謝って逃げられてちょっとシヨックを受けているわで本当に君は…」

「だからきいてんのかつてきいてんだよぼけええええ！」

怒りが頂点に立ち、背中に縛り付けているズツシリとした長い太刀を手馴れた手つきで鞘から抜き取り、男の目の前に刀を向けた

「ん？つてうおお！？」

流石にしゃべり続けていた男も気づく

「次は何だいきなり！なんか悪いことしたかおれは！？」

「ああしたね！ヒトの話無視してペラペラ喋りまくりやがって！ス

クラブにしてやらあああ！」

キングが刀を振り上げた瞬間

「…ん？」

男は頭を抱えたまま紙切れを見せた

「なんだ？今時紙切れ書いてあるなんて」

今の時代は全てフォトンといった元の形を持たない物で情報を伝え、紙に字が書いてある物なんて滅多に無い、キングは振り上げた刀をそのまま上空で止め文字を読んだ

『レリクスにとじこめられた少女の救出出来る物を求む』と書いてあった

レリクスとは、とてつもないほど昔のヒトが作ったものだ、だがキングには全く興味はなかった

「言いたいことはそれだけか？」

再び両手に力をいれる、それに気づき、慌てながら説明をする

「待て待て！金に困ってるんだろ？話無視した俺びに仕事紹介してやるから！」

なんで金に困ってること知ってた？と思いつつながら刀を鞘に戻す。

「で？俺は今からどこに行きゃいいんだ？」

その気になったキングを見て安心し、立ち上がって車に指を刺した

「俺が案内しよう」

二人は車に向かって歩いていった

「そついやお前名前は？」

「なまえ聞くときはまず自分からっていうだろうが…」

「……………」

凄い目で睨んでくるので慌てて名乗った

「バスくだ」

「ふうくん、おれはキングだ、よろしくな」

二人は車に乗り、海に向かって行った

## 仕事（後書き）

今回は次に繋げる話みたいになりました

行き先は知っているヒトは知っているとあります

知らないヒトは…

次の話を見てください^^

## 小さな羽根を抱いた少女・上（前書き）

じぶんのかいた小説をよんでみたらとつてもよみずらかったので、  
もうすこし分かるように書こうとおもいます…

今回はキングの小さいころの話から始まって元に戻します

前回の話が少な過ぎたのでまた投稿しました。

小さな羽根を抱いた少女・上

「キング、キング」

「あ〜？」

眠たそうに体を起こし、小さなあしでペタペタと廊下を歩いていく

台所に行ってみると、弁当を作っている姉の姿があった

「なに」

「いや何じゃないでしょーが、もう朝だよ」

苦笑いをしながら軽くツッコんだ

「早くご飯たべちゃいな、冷めちゃうよ」

言われたとつりに食卓に上がるつもりだが、小さ過ぎていすに座れずにいる

そんな姿を見てつい、小さく笑ってしまった。そんな小さな笑い声も聞き逃さず、こつちを泣きながら睨み付ける、睨むとは言えない様な涙目でこつちを見ている

「はいはい」

そういつと、笑うのをこらえながらキングに近寄り、抱っこをして椅子に座らせる。これは毎朝の姉の日課になっていた

椅子に座らせてもらって頭をポンツと触られてまた台所に戻った

キングはまだ不機嫌でいる

「なあ、姉キ」

「ん〜？」

「…肉が入ってない」

朝ごはんは魚と味噌汁だった、朝ごはんとしては定番のおかず。

「…へ？」

「にくー！にくがくいてー！」

キングが肉、肉と吼えまくっている、無視するわけにもいかないの  
でキングに近寄った

「お肉ならあるでしょーが」

姉が指をさしたのは魚、つまり魚肉。

「ちげーよ！魚のにくじゃなくてモンスターのにく！コルトバの  
くが食いたいー！」

コルトバとは原生物を、食用に遺伝子組み換えしたモンスターだ、顔が不細工なほど旨いらしい

もちろんそんな高いの買えるわけが無い

「そんな高いの買えるわけないでしょ、魚の肉をコルトバの肉だーコルトバの肉だーって思えば自然とコルトバの肉の味がしてくるわよ」

「するかあああ！」

勢いよく椅子からジャンプして姉に飛び掛る

「にくー！にくをよこせええ！」

毎朝こんな風にギヤアギヤアと家から聞こえてくる

俺は幸せ者だこんな幸せ、ずっと続いてほしい……

まだ幼いキングはもうこんなことを思っていた

「おい、キングおきろー、着いたぞー」

海に着いた、バスクは地上に車を止めると、おこそうとする、だが  
キングは深い眠りから覚めない

「おきろーち…」

ガキン！

バスクは『チビ』と言おうとしたら腹に思いっきりストレートを食  
らった

「…なんか、言ったか？」

バスクは青醒めながら、なにもと言った

車を降りてあたりを見てみると、海しかない

「おいおい、レリクスなんてないぞ」

「今回のレリクスは普通のレリクスじゃない、海底のレリクスだ」

「って言ったって入り口ねえじゃんか」

「ん？入り口なら…ほら、あそこだ」

よく見てみると、海に穴が開いている

「あそこなのか？」

「ああ」

泳いでいくのか…？

キングの顔が引きつった、そんなキングをみて、はて？と思いながら車に向かった

「おい、行くぞキング」

車で行くのかと安心して車にのった

こいつ、泳ぐの苦手なのか？

バスクは人を見るのが上手いらしい、バスクが一人でぷつと笑うとキングはギクツと苦い顔をし、窓の外に視線をやり、ごまかした。

## 小さな羽根を抱いた少女・上（後書き）

今気づいたんですが、1話で『130位の小学生の様だ』とありましたが、あれはただの例えであって、キングはれっきとした大人ですっ

てゆうかサブタイトルが全くかみ合わなかった…

次がほんとの上みたいだな…

小さな羽根を抱いた少女・中（前書き）

さてさて、テスト勉強もせず、これに集中しますか  
いいんだよこの野郎、おれ、頭いいから。

なんていえたらいいのになあ

小さな羽根を抱いた少女・中

二人はレリクスの入り口前にいる、穴の開いたかのような海のところは空間で、水が流れていなかった  
まるで周りにガラスを張っているかのように

ピピピ…ピピピ

バスクの通信機器がなった、キングが出るよと促し、通信にでた

「バスクだ、どうした？」

「ああ、実は中の二人が動き出したらしい、もっと早くに、連絡できてりゃ良かったんだが…」

「二人？一人じゃなかったのか？」

「ああ、それもさっき手に入れた情報だ、もう一人、おマヌケさんがいたらしい」

この仕事の依頼者だろうか？しかし依頼者のわりには色々な事に詳しい。司令官だろうか？

「…ああ、じゃあ出来るだけ早くたのむぞ、じゃあな」

「まっそういう訳だ、出来るだけ早く、頼んだぞ」

「お前は？行かないのか？」

「え？…ああ、おれはほかにやる事があるからなあ、ほら、周りの状況を調べたりとか…」

と言い、なぜか視線をそらしながら言った、キングは何も疑問に思わず、了解、と言ってレリクスの中に入っていった

レリクスの中に入ると、違和感を覚えた

（おかしい、レリクスには自立機動兵器がいるはずだ、なのにその姿どころか、気配さえ感じない）

フン、と鼻で笑い、歩き出した。どうやらもう一人のおマヌケさんは腕が立つらしい。もう一人の方が腕が良いのなら、もうとっくの昔に行動に移して、脱出しているだろう。そう考えたのだ

しばらく歩いてみると、トラップがあった、しかし、そのトラップはもう解除済みだった。

腕も立つし知識もある、相当な経験者か？でもだったらなぜ脱出ができなかったんだろうか？

そんなことを思いながら、畏も、ドアのロックも解除されているレリクスをひたすら歩いた

「…退屈だなオイ」

イライラしている時に独り言が出てしまうのがキングの癖だ。

そんな時、奥の方で大きな音がした

「臭いがする、人間の臭いだ、やっと追いついたか」

キングは音のした方に走っていった。

音のしたところに行ってみると、大型の自立機動兵器がうじゃうじゃしていた。二人の姿が見えない

「こいつ等の向こうにでもいるのか？とにかく、こいつ等の注意をこっちに向けねえとな」

キングは大きく息を吸い込み

「うらあああああああああ！！」

鼓膜が破れそうなくらい大きな声をだした。バインドボイスだ。

周りが細かく揺れている。

「…あああああ!!」

ビクツと二人の人が驚いた

「ちよっ…何いまの!？」

「結構遠くからだね、なのにこれだけでかい音なんて、相当大きな声みたいだね」

「あれって声なの!？」

「うん、はっきりとわかったよ、でも人じゃなさそうだ」

落ち着いた口調で話す男とビビりまくっている少女だった。キングの読みは間違いではなかったらしい

「とにかく、今は目の前の敵を倒せてね」

「う…うん」

今の叫び声えでほとんどの敵がこちらに気づいた。

ニヤリと笑ってこう告げた

「こっちはいまモンのスゴークイライラしてんだ、だからいまから八つ当たりさせろやあああ！」

そう言葉を吐きつけて勢いよく敵に向かって走っていった。

背中に縛り付けた長い太刀を鞘から抜いて、カ一杯横に刀を振った。

そして3体くらいの敵を一振りで粉碎した。

その横に振った勢いを残したまま、回転切り。

その太刀筋はどこ流派にも沿わずただ好きなようにあばれまくっている。自分流の剣を持っているようだ。

キングは敵を圧倒した。

しかし

キングが動きをいきなり止めた。キングは周りの気配を感じ取った。

男の…気配がきえた…

そんな事を考えてるうちに次に悲鳴が聞こえた

まずいと思い、考えるのを止め、声の方に走ろうとした瞬間。

声のした方から激しい光が放たれた

あまりにも眩しいので思わずキングは目を閉じた。

光が収まるのを肌で感じ、目を開けてみると。

「…敵がない？」

さっきまでいた敵が1体も見当たらない

どうなっているのか全く解らず、それに追い討ちをかけるようにキングの背筋が凍った

…さっき消えたはず男の気配が、まだ残っていた。

「いったいどうなってやがんだ」

何が起きているか分からない、でもキングは、慌てて走った。なにがあったのかをこの目で見たかったからだ

二人のいる所に行くのと倒れている。でも息はしっかりとしている。

キングは二人を背負い、レリクスから、出た。

外でバスクと出会い、救出出来たことを報告する。

バスは安心して顔をよくやってくれたと言いき車に三人を乗せた。

小さな羽根を抱いた少女・中（後書き）

あと一回でこの話は終わりに出来たらなと思います

このはなしを書き終わったら楽できる…^^

小さな羽根を抱いた少女・下（前書き）

アクセス数を見たら見てくれてる人がいて嬉しかったです  
見てくれてる人が5人いじょういるー！ー！なんて大はしゃぎし  
ました。

小さな羽根を抱いた少女・下

車は今、空をとんでいた。中には意識のない二人と、運転するバス  
ク、それから納得のいかない顔をしたキングがいた

「どうしたそんなに不機嫌そうな顔して、何かあったのか？」

「いや…」

さっき起きた事を言おうか言おまいか迷っていた。言ったところで  
信じてもらえるのか？

こいつは人間じゃない、けど所詮人間に作られた機械…

「だからおれとってねーつつつてんだろーが!!」

「じゃかつしゃああ!おのれが柿ピー盗んだんじゃろがー!」

「盗むかああ!大体テメー等人間が作ったもんなんてくいたかねえつての!ちゅーか柿ピーってなんだぼけええ!」

これはまだキングが小さい頃の事。街にも慣れ、一人で散歩くらいは出来るようになっていた。

することがなく街をのらりくらりと歩いていた。

ヒタヒタと歩いていると店から二人のヒトの子が走っていった。そんなのは気にもせず、ヒタヒタと歩いている。すると後ろから肩に手を置かれた。

「おい、取ったもん出せ」

凄顔でキングを睨んでる。店の人らしい

「ん？とつたもん？」

当然の如く、とつた物なんてない、そんなもの知らないよと言ってまた歩き始めようとした

そしてさっきの会話に繋がる。

「うるせえうるせえ！ピーストの言うことなんて信用するか！おおかた買う金もなく盗みに走ったんだろーが」

おやじはとても憎たらしい顔で得意げに言った。もちろんこのあと喧嘩になったのわ言うまでもない。

人間なんか……

「おーい、きいているかー？」

昔のことを思い出していてキングは、話を聞けていなかった、悪い  
と行ってなんでもないと言った。

そうかといってバスクは運転に集中した

人間なんか…

そう思いながら二人をまじまじと見つめた

人間…なん…か…？

「おいバスク」

「どうした？」

キングはゆびを指した、指した相手は男だった

「こいつ…人間？」

「ん？なに言ってるんだ、列記としたビーストだよ」

なにと驚いた

「だってこいつ人間の臭いがするのに」

「人間のおい？」

どういうことだ？とバスクは不思議そうにしている、第一、ビーストと人間のおいの違いなんてあるのか？

「まあ、こいつの事はよく知らんだ、なんせ始めてみる顔だからな。」

「とゆうか、お前、種族はなんだ？」

そういえば聞いていなかったなと思い聞いてみた

するとキングは少しムスツとして答えてた。

「…ビースト」

「ビーストか」

ビーストなら、ヒトのにおいか他の種族のにおいか分かるのかと少し納得した

「っていつても元は捨て子だし、ビーストじゃないかもしれないけどな。筋肉のつき方がビーストに似ているから国籍上はビーストってことになってる」

バスクは悪いことを聞いたと思い、少し反省した。

「あん時の俺等はほんとにやかましかったなあ毎日毎日ギヤーギヤーとほえてたからな」

キングの顔を見る限り、気にはしていなかったようだ。バスケットは少し安心した。

「キング、お前、兄弟でもいるのか？さっき俺等って言ったろ？」

「ああ、いるよ、もちろん血は繋がってはいないけど。上に一人と下に一人」

やっぱり気にしていたか？わざわざ血は繋がっていないなんて言わないでも分かったのに。そう思いながら疑問に思う事を次々と聞いていった。

「兄弟は、元気でやってるのか？」

「さあな」

キングは悲しそうな顔で窓の外を見ている

またやってしまったと反省した。次の言葉が出てこない…

「ま、このことは話せば長くなる。また今度ゆっくりどこかで話してやるよ」

「ああ、頼むよ、その話には、少し興味がある。どこかのカフェでゆっくり聞かせてくれ」

「おっねよ」

そう笑って言った。バスクは仕方なさそうに了解した。

でもキングの顔にはまだ悲しい表情が残っていた。

「そら、ついた降りろ、キング」

ついたと着たのは空港。今時の空港は宇宙関係のものしか存在して  
いなかった。いまは空を飛ぶ車がある時代。  
空飛ぶ飛行機は不要となっていたのだ。

「なんで空港なんだ？ 依頼人にこいつ等渡しに行かなくていいのか  
よっ。」

「なに言ってる、依頼人は宇宙にいるんだぞ」

宇宙に住んでるのか。いったいどんな奴なんだろうか。

そんなことを思いタコのような宇宙人を想像してしまい思わずプツと笑ってしまった。

「ちょっと、ここで二人をみていてくれ」

そう言ってバスクは受付まで歩いていった

しかし、こいつ等、いつまで寝てるつもりなんだ？

あれから結構な時間がたつのに一行に起きない

ずっと二人を見つめていた

「キングー」

声に気づき、はっとして声のするほうに視線をやった。

「その二人をかついでこっちまで来てくれないかー」

めんどくせつと思いなながらも二人をヒョイツと軽く担ぎあげた。

バスクはおおつと驚き少し声をあげた

周りから見ると、小さな子が大人一人と少し大きくなった子供を軽々と持ち上げていると驚いてずっとキングのほうに視線をやった。

キングにはこの視線は何なんだと不思議に思いながら、なぜかわるい気はしなかった。

バスクのところまで行き、この金属探知のついた門を通るぞとキングに指示した。

「あ…お客様」

ん？と気づいたときには遅く、金属探知が反応を起こした。キングの背中に差している長い太刀が金属探知に引っかかった。

「なんだ？ビービーやかましいオイ」

慌てて係りのヒトが慌ててブザーを止めた

「すみませんお客様、金属品は持ち込めませんので…」

「じゃあこの刀をおいてけっというのか!？」

話をさえぎってキングは驚きながら質問した

「いやですから…」

「こいつを置いていくなんて出来ねえ!!こいつを置いていくならここでこいつと残ってる方がましだ!!」

いつもと違う顔で係員に訴えかけている。バスはキョトンとして  
いる

「ですから！この送信ポットの中にいれてくださいって！むこうの空港までこちらで送信しておきますので！」

大きな声で係員が説明してくれた。キングは涙目になっている。

「じゃあいつは向こうでも会えるのか？」

会えるって……。バスクは笑いそうになっていた

「は…はい、会えますよ……」

会話を合わせてくれた係員の顔を見てとうとう笑いがこらえれなくなった

「よろしく…頼む……」

泫々涙目のまま刀を差し出す

「きゃあ!..!」

悲鳴を聞いてバスクが我に返る

「お...重い」

両手で持ち上げようとしてもピクリとも動かない

バスクが駆け寄り持ち上げようとした。だが、ピクリとも動かない

二人とも肩でいきをしている

そんな姿を見たキングは涙を拭き、刀をヒョイと軽く持ち上げ、ここでいいのかと指示をあおる

「え...ああ、はい、そこです、有難うございます」

なんていう筋肉をしてるんだこいつ…

バスクはおどろきながらキングを見ている。キングはなぜか赤い顔をしてひとりでスタスタと行ってしまった

バスクはまた笑いのつぼに入ってしまった。

「どれに乗るんだ？」

空港が始めてのキング。なにをしていいのか分からず、キヨロキヨロとしていた

「あれだ」

バスクが指差したのは小さな船。

「小さいな、バスクの船か？」

「馬鹿いうな、こんな高いもの買えるわけがない会社のだよ」

会社の？そんな事を思いながらも、船に乗った

中は外から見るよりも、結構広かった

「これは車と違うからな、着くのは一瞬だ」

なにかを入力しながら説明してくれた

「座ってくれ、シートベルトは付けるよ」

言われるとつりにした。

「よし、じゃあ出発」

勢いよく船が空港から出た。確かに早いが一瞬というほどの速さじゃないかとガツカリした。

そんなキングを見て

ニヤニヤしながら、バスクはスイッチを押した

そのとたん周りが真っ白になった

なんだこれはとキングが驚いている

そんな驚く暇もなく気づくと景色が戻った、そして目の前には大きな何かが浮かんでいた。

それは衛星のように見えるのだが衛星にしては大き過ぎるし、なにより中にはヒトがいる

「なっ？一瞬だったろ？」

混乱しているキングを見て、笑いながらそういった。

中に入ってみるとここは宇宙ステーションだとキングはわかった。  
そして混乱が解けたときキングは周りをキョロキョロとしている刀が  
気になるのだ

「刀ならあそこにはいつているぞ」

なぜ言ってもいないのに分かったのか、不思議におもいながらサン  
キュツとボックスのほうに走っていった

ふたりはとりあえずここで寝かせておいて、報告に行くことにした。

「なあなあ、ここはどついう所なんだ？」

刀が背中にあるので、嬉しそうにバスクに問いかけた

「ここはクラッド6という所でスカイクラッド社が経営しているところだ、リゾート地区にシヨッピング地区、他にも様々なところがある色々な分野に手を出したところさ」

長々と説明を聞かされながら、扉をくぐると、いままで見てきた所と少し違った雰囲気だった。

「ここは、リトルウイングという軍事会社だ。お前が受けた依頼人がいる所で、俺の働き口だ。」

なるほど。こいつはこの従業員だったのか。だったらいままでの疑問は消えるな。キングの今までのバスクに対する疑問が一気に解決された。

リトルウイングには。武器屋や戦闘で役に立つ道具などが売られて

いるシヨップなどがあつて、  
正面にはシヨップとはなにか違つところがあつた。

そこから一人の長身の男が扉をくぐつて出てきた。ひげを無造作に生やし、髪の毛で目がかぶさつて見えない

その男からはビーストのおいがかすかにあつた

「よおバスク、どうだ？二人は見つかったか？」

「ああ、無事に救出したよ、こいつが」

キングのほうにバスクが顔を向けた

聞き覚えのある声…どこでだろうか？

「そうか、お前さんが救出の依頼を受けてくれたのか、ありがとよ、俺はクラウチってんだ。  
クラウチ・ミュラーだ」

俺はキングだと返事を返した。そしてキングは思い出した

(通信でバスクと話していた奴だ)

「で、二人はどこだ？」

「ああ、今はシップに寝かせてる。あとで部屋に運んでおこう」

そうかそうかとうなずき。話を元に戻した

「さて、とりあえずだ、こんなところで立ち話もなんだしカフェにでも行くか」

男の指差す方向にはカフェがあった

「こんなところにカフェがあるんだな」

キングは珍しそうに話していた

「なにを飲む？おこるぜ？」

長身のおとこがおごってくれるらしい、なかなか気前のいい男みた  
いだ

「じゃあおれはコーヒーで」

バスケットは遠慮なしに注文をした。相手の好意にはちゃんと応えるら  
しい

「お前さんは？なにがいい」

「じゃあ俺は…」



なぜか男がニヤリと笑った

「行く当てがないのなら、ここで働かねえか？見たところいい腕っ節を持つてるみたいだしなあ」

願ってもないチャンス、仕事ができるなら生活も安泰だ

「なにより、あいつの情報も入ってくるかもしれない」

ちいさな声で呟いた。

キングはもちろんだと了承した

小さな翼を抱いた少女 終

小さな羽根を抱いた少女・下（後書き）

やっと1つの話が終わった！これからは少しの間、楽をして行こう  
と思います！

## 昔話（前書き）

キングの過去にせまります。少し残酷かもです…

## 昔話

「とりあえず、お前さんのことを色々聞かせてくれるか」

そういつて何かをガサガサと探している。

「面接じゃないから、リラックスしてくれりゃいいぜ」

いわれずともしっかりリラックスしている。ここはさっき見た事務所の中だ。

あったあったと、なにかファイルを取り出してこっちに戻ってきた。ペラペラとページをめくりながらクラウチは質問を始めた

「とりあえず、名前からだな。えーと、名字は？」

「ない、捨て子だから俺は、キングは親父がつけてくれた名前だ」  
捨て子だったのか。色々聞きづらくなるな。仕方ないか、と次の質問をする。

「そうか…じゃあ家族のことを教えてくれないか？」

勿論だと頷いてくれた

「親父に姉キ、兄キと弟だな。親父はアギロ。姉キはレナ。兄キはロウで弟がジャック。  
母親はジャックを産んでからすぐに死んだよ」

そうかと言って、クラウドは、ファイルに挟んである紙に書き込んでいた

「なんで紙に書いてんだ？このご時勢に。もっと便利なもんは腐るほどあんだろっよ」

「ばかいえ、個人情報だぞ？うかつにパソコンなんか打ち込んでハッキングでもされたらどうすんだよ」

以外に真面目だな。人は見かけて判断しちゃいけないとキングは学んだ。

「まあ腕づくでとられちゃあ元も子もないんだけどな、データをこつちから消せるわけでもねえし」

ガハハハと笑っているクラウチを見てみたら。あまり深いことは考えてなさそうに見えた

前言撤回だなこりゃ…

「…よしまあこんなもんか。お疲れさん」

質問を一通り終えたところで、クラウチが真剣な顔になった

「なあ…一つ聞いていいか？」

なんだ？とキングはクラウチがくちを開くの待った。

「10年まえ、大きな戦争があった。100年に続く大きな戦争

の終止符を打った戦争だ」

するとキングの顔が一気に曇った。

100年に続く戦争というのは。人間の奴隷だったビーストが反乱を起こしたことから始まったもの。

はじめはビーストのみの反乱軍だったが、しだいに人間に不満を持つニューマンたちも、反乱軍に

加わった。50年くらい冷戦状態だったのだが10年前にまた大きな戦争が起きたのだ。

「俺は昔刑事をやっていたからなあ、そのことに関しては、よくしってたんだ。ただひとつだけ調べても調べても分からないことがあったんだよ」

キングは黙ってクラウチの話に耳を貸す

「10年前、人間側は負けを認めた、理由も言わずに。それまでは

人間側が凄く有利だったのに。」

「それで、俺は噂を耳にしちまった。いまでも忘れることができない  
え」

「戦争に終止符を打ったのは実は小さな村との戦いだったらしい。  
軍との戦いで村は壊滅状態だったのに、一瞬で軍が消えちまったら  
しい。そこに立っていたのは。金髪の背の小さな赤黒い肌をした男  
だけで、そいつの力におびえて降参した。っていう噂だ」

「そこにたっていた男ってのは…お前さんじゃねえのか？」

あたりに緊張が走った。少し間をとって。キングはゆっくり頷いた。

「そうか…やっぱりそうだったんだな。その話…詳しく聞かせてく  
れねえか？」

キングは頷き全てを語ってくれた

「この辺りでの反乱分子はもう貴様等のみだ！大人しく降参したらどうだ？」

そう言ったのは兵士長のような男だった

10年前の話。ここは小さな村で、あたりの町や村は人間の軍によって制圧されていた。

「俺たちは腐つてもお前達に降参はしない。お前たちが犯した罪を全部償わせるまで」

そういったのはキングの父、アギロだった。

「罪だあ？そんなもの我等は犯した覚えなどないな、いうなれば、貴様等ビーストが起こした反乱こそが罪だ！」

「腐ってやがる……」

小さなこえでロウがそう言った

「なんだと？今なんと言った小僧！」

「ルサーコラッ！さっきからギャーギャーわめいてんじゃねーぞ！  
またコテンパンにされてーのか！？」

威勢の言い言葉を吐いたのはキングだった

今までになんとか襲撃には会っていた、しかしことごとく4人にぶちめされ撤退を何度か繰り返していた。

そんな状況にしびれを切らした人間側が軍5隊ほどこの村に送り込んできた。その数はおおよそ1000人くらいの兵士がいるだろう

この状況さすがに不利と悟った

キング以外。

しかし、ここで怖気づつわけにはいかない、後ろには俺の愛する家族達がいる。なんとしても勝たないといけない。アギロは集中し始めた。

「行くぞゴラアアア！」

キングの掛け声と共に4人が敵に向かっていく。敵もすかさず応戦してくる。

キングが先頭を切つて長い太刀を振りながら大雑把に敵を切り倒していく。

すかさず、後ろから3人がキングの攻めで負傷を負った敵を確実にしとめていく。

いつものようにまた、勝利を勝ち取れる。そう思ったアギロだった

しかし

敵の兵士長のような男がニヤリと笑った

「いまだ伏兵部隊。村人を奇襲せよー！」

その声と同時に側面から兵士が出てきた。その兵士たちは4人を見向きもせず、村人のいる方に走っていった。これまで何度も戦っていたのである程度の戦法を兵士長は読んでいたのだ。この4人は後ろが空になると。

「しまった！村人たちが！」

村人たちがいる方に行こうとした時

「とっさんあぶない！」

ジャックが叫んだときだった

ズドーン！

大きな音がした

大砲だった

アギロに命中した。まわりの兵士たちも何人が巻き込まれた。

大砲をうてと指示したのは兵士長だった。

ジャックは呆然としている。

後ろから敵が切りかかってきた。

「危ない!!」

ジャックの後ろには敵がいた、すかさずロウが敵を倒した

「なにポーっとしてんだ!あぶないだろーが!」

「だって…とうさんが…とうさんが」

ジャックは涙を流していた。無理もない。まだ物心がついてから日の浅い子供だ、シヨックが大き過ぎた

「とりあえずここいらの敵を片付けてキングと合流すんぞ」

ロウは落ち着いていた。きっと内心は張り裂けそうな気持ちになっ  
ていてしかたがないはずなのに

「まだ戦えっか？」

ジャックは涙を拭き。うんと頷いた

「ふ、ふはははは！やったぞ！ついにやったぞ！ついにアギロを…」

大きな声で笑っていた兵士長は胸ぐらをつかまれ、地面に押し倒された。キングだ

「なにしてくれてんだこの野郎！！テメーのせいで、親父がっ…！」

憎しみを拳に乗せ、キングが殴ろうとした瞬間。村人たちの悲鳴が聞こえた。そして村人たちの気配がどんどん消えていった。姉の心配までも

その声に気づいたジャックは泣き叫び、ロウも戦意を失っていた。

「くはははは、もう何もかも遅い、貴様等は負けたのだ、フハハハハハハ！」

「！…！」

兵士長は笑うのをやめた。笑えなかったのだ。上にのっかかっているキングは無心に兵士長を睨んでいる

「……………」

キングが何かを言った。兵士長には聞こえなかった。

「うあああああああああああああ！！」

「……………」

クラウチは絶句していた。まさかこんなことが起きていたなんて

「その後のことはよくわからねえんだジャックもロウも死んだのか  
生きてるのか今はわからねえ。  
なんせ気づいたら牢屋の中だったからな」

キングが話を終えた。その顔はやはり曇ったままだった

「ありがとよキング俺は大きなことを一つ知ることが出来た。今日  
はもう休みな、明日、色々と説明するからよ」

そういつてキングに一枚のカードを渡した

「こいつは部屋の鍵だ。心配するな、そこは誰も使ってねえ、お前  
のものにしたらいい」

部屋のカードキーだった。居住区の場所を教えてもらいキングは居  
住区に消えていった

「人を毛嫌いする理由はこのことだったんだな…」

途中でバスクにキングが人にたいして異様な拒絶反応を起こしてい

たと知らされていたのだ

クラウチは、紙に色々と書かれたファイルを閉じそつと棚にしまった。

## 昔話（後書き）

キングの昔話でした。まだまだキングには秘密が隠されています。  
てゆうか隠してます俺が！

のちのちにあきらかにしていきますね！

## 太陽（前書き）

一週間が過ぎるのははやいですねー  
もうあっという間に次の週になってるし。なんて思っている俺は  
ジジイですか？

太陽

ガバツ

ふと目が覚めた。なぜだろう、思う様に寝付けない。布団が変わったからだろうか

そんな事を思いながらキングは上半身を起こしてボーっとしている。辺りはまだ暗い。

「もう一眠りしてみるか…」

そういつて時計を見てみた。するともう5時だった。あれ？っとキングは不思議に思った。

「…そっか、ここ、宇宙だったんだよなあ」

宇宙でも太陽の光は届く、しかし地球の真後ろにあるクラッド6は見事に太陽の光を地球にさえぎられていた。

「太陽の光がないって、こんなに不安になるもんなのか」

そんな事をつぶやきながらペタペタと足音をならしながら部屋を出た。

辺りはまだ暗かったが薄い青色をした光の弱い電気がついていたので真っ暗というわけではなかった

気ままに散歩をしていたらいつの間にかあの雰囲気の違ったところに来ていた。

「よお、おはようさん。朝が早いんだな」

その声をかけて来たのはクラウチだった。

「どうだ？少しは気分が晴れたか？」

昨日の、あの話をさせてしまい、不安に思っていたようだ。ああ、大丈夫だと言葉を返すと  
そうかと安心してくれた。

「太陽が出ていないって、こんなに不安になるもんなのか？」

ずっと地上で暮らしていたキングにとって。朝に太陽の光を拝めな  
いのは、初めてだった。

「さあな、俺はここに来て結構経つからなあもう慣れちまってわかんねえな。ただ、いままで当たり前だったことが、当たり前でなくなるのは、いささか、不安を覚えるもんさ」

そう笑いながら答えてくれた。当たり前前の事が当たり前でなくなるか…初めて感じたな、こんな事

「まっ太陽が恋しくなったらまた地球に遊びに行ったらいいさ」

そつだなど笑みを浮かべながら答えた。クラウチはなぜかこちらをまじまじと見つめている

「お前さん、始めて会ったときも思ったんだが。その身なりはどうかと思っぜっ」

そつか？と言いながら自分の服を見ている。刑務所から出てから着替えを一回もしていないため着ている服は囚人服だった

「よくそんな格好でウロウロできたなあ。そうだよけりゃ、俺のお古をあげてもいいぜ？」

ずっと同じ服は流石に気持ちが悪いので、丁度良いといってクラウチの部屋の前まで行った。

しばらくしてクラウチが自分の部屋から出てきた

「一番小さいサイズはこれしかなかった。まあ着てみな」

その服はクラウチとお揃いだった。白いワイシャツのような物と赤が混じったカッターシャツ。その上に黒い大きなマントのような黒い上着だった。

いわれたとつりに着てみた。

「おお似合う似合う。カッコいいじゃねえか」

もともと髪色が金だったので黒とマッチしている。

「ただなあ……」

そういつてクラウチは、キングの全体を見渡した。

「サイズがあまりにも合ってねえな」

一番小さな物でも、キングからしたら大きめどころの話ではない。腕は見えずに余った部分の服がタランと下に垂れ下がっている。ズボンも当然足が足りず、服が余っていてズルズルと引きずる状態になっている。

「ちょっと歩いてみ」

クラウチはなぜか笑っている。

言われたとつりに歩いてみると、当然の如く、ズボンがズルズルと引きずっている

「こりゃカッコいいじゃなくて可愛いだな」

腹を抱えて笑っている。キングは可愛いじゃねえ！カッコいいだ馬鹿やろう！と否定してきた。

どうやら可愛いと言われるのが苦手らしい。

キングからするとカッコいい＝男らしい。可愛い＝軟弱。という考

えらしい。

「それと同じのを。お前さんのサイズと同じ服を調達しておいてやるよ」

笑いをこらえながら言ってきた。キングはありがとなんといつてズルとズボンを引きずりながら部屋に帰って行った

こけるこける…

クラウチは意地悪そうに祈った。キングの姿が見えなくなってから少ししてドテン！という音がした  
その後。いてえなチクシヨーが！！と大きなこえが聞こえてきた。

期待どりのオチ、ありがとさん。と笑いながら自分の部屋へと帰って行った。

## 太陽（後書き）

ここで皆さんに大きなお願いがあります。

もう一人の主人公的な人の名前を決めて欲しいのです。自分は名前をつけるのがとてつもなく苦手で、父・アギロはなんかオトコツぽかったからで。

姉と兄貴は適当。キング・ジャックはトランプからいただきました  
そんな自分で名前を決められない、僕に救いの手を差し伸べて欲しいです<>

名前を考えてくださって、その主人公的な名前に入らなくても。どこかで絶対に使わせていただきます。なぜなら名前を考えるのが苦手だからー（泣）

とゆうわけで、名前と、その人の性格などを書いて『感想』の所で  
も何でも良いのでとにかくバンバン送ってきてください！お願いします！

あいつ達はどこにいる？（前書き）

なんかだらだらと目的もなくはなしを書いていてもいいのが思いつかないので

またそろそろ長編に入ろうかな、しかも小さな羽を抱く少女とは違いオリジナルで行こうと思います。

あ、そうそう。明日から、新しい小説を載せて行こうと思っています。

その主人公的存在にするのはジャック君にしようかと思っています。

みてくださいねー

あいつ達はどこにいる？

キングはいまミッションを受けていた。場所は地球で唯一緑がある地方。パルムだった。あたりは草原しかない所だ。依頼内容は、近くにディ・ラガンという大きな原生生物の駆除  
依頼者は、牧場を営んでいるビースト。

「なんで俺までこんなとこにきてんだか…」

ぶつぶつと文句をたれているのはバスクだった

「決まってるだろ。おれがシップを運転できないからだ」

「気晴らしにフリーミッションでも行ってこればどうだ？」

設備の案内を終えたクラウドが話を持ちかけてきた。

「ここ2・3日なんもしてないだろ？ちょっとは体動かしてこいよ」

クラウドは一枚のカードをくれた。身分証明書らしい。これがないとミッションを受けられないからとしっかり注意を受けた。

「それにしてもキング。なんだその服装は」

まじまじとキングを見つめていた。キングはあのサイズが合わない服をきていた

「カッコいいだろ？」

同意を求めてきたキングに、カッコいいよりむしろ可愛いだと言った。

「なんでお前までクラウチとおんなじこと言うんだよっ！」

頬赤く染めて可愛くないっ！と主張してきた。はいはいと軽くバスクは流した。

キングの戦闘を見るのは初めてのバスク。そのスタイルを見て初めての言葉が無茶苦茶だなだった

ほとんどバスクは手を出さず。キングが長い太刀を振り回して原生生物を倒していつている。

よくあんなに重い物をあんなに軽々しく持てるなそんな事を思っていたらもうディ・ラガンがいるともわれる広い草原にきていた。

キングもその気配に気づき大きな声で挑発した。

「うりゃああ！デッケエの、テメエを倒しに来てやったぞー！悔しかったら出でこいや！」

なにが悔しいんだ、そんな事を思っていたらギャオーと大きな声をだしてそらからディ・ラガンが降りてきた

ほんとに、なにが悔しかったんだろうか？

いつのまにかディ・ラガンはぐったりしていた。はやっ！いくらなんでも早過ぎるだろう！

「なんだこいつ、デッケ割によわっちいの。見掛け倒しだな」

いやいやいやとバスクは首を振っている。結構な経験者でもここまですぐ倒したやつなんて見たことがない。

「これが、キングの力か」

バスクは改めて関心した。始めてみたときから結構な使い手だとは思っていたが、ここまでのやつとは。

「さあ帰ろう帰ろう」

もう終わっちゃったと物足りないようすで帰ろうとしている。

「コラコラ、依頼者に報告しないといけないだろうが」

「じゃあちょっとしてくれや、めんどくせえし」

じゃあなと手を振って遠のいていった。報酬は多めにおれが貰っていてやるうかと心の中で思った

「いっとっけど、報酬多めに貰おうとかしたらたたじゃ済まさないからな」

ギクッあいつは心でも読めるのか？ 渋々報告に行った

キングは帰り道だった。ゆっくりリズムのいい足音が聞こえる。

「……………」

なんだろうか、この気配。バスクの物じゃない。なのに知っている気配だ。しかも懐かしい。

ガサガサと音がした瞬間。ものすごいスピードで誰かがキングに襲い掛かってきた。

「うわっ！」

なんとか避けることが出来た。

「あぶねーだろーが！いきなりなにしゃがる！」

切りかかってきたのは男らしい、とても小さな男だ。両手には双小剣ツインダを持っている。キングと同じくらいの背で灰色のフードと服に赤のライン、白で模様の施された姿は忍者のように見えた。

「……………」

何も言わずにまた襲い掛かってくる。キングは鞘から太刀を抜いて応戦した

すさまじい速さで双小剣をと足を使って攻撃してくる。重い太刀を使うキングに対して軽い双小剣を使う忍者のような男。キングのほうが不利なはずなのにキングは全て防げた。

右、下ここで足払いをかけて上段回し蹴り…

キングが思ったと通りに男は攻撃を仕掛けてきた。勿論すべてキングは防いだ

キングは敵を押し少し驚きながら名前を呼んだ。

「…ジャック？」

「!?!」

その名前に、男は反応した。少し戸惑っているようだ

「なあ…ジャックなのか？」

「……………」

「なあ…」

話をさえぎって男はまた攻撃を再開した。しかしさっきよりもキレがない。動揺しているようだ。

男は仕方なさそうにその場を退いた。

「っ！…まで！」

キングがことばを発したときにはそこには男の姿はなかった

「なにしてんだ…あいつ…なんであんな格好してる？なんで俺を攻撃してきた？それにあいつの目…」

あまりにも、攻撃パターン、癖がジャックが一致し過ぎていたため、キングはジャックだと確信した  
ジャックとは勿論、あのときの戦争から姿がなかった弟のことだ。

その弟の目は酷く悲しい目をしていた  
まるで助けてくれと言わんばかりに

キングは出所してからずっと探していた、いわばキングの二つの目的。

色々と考えているキングに聞き覚えのある声がした。バスケット

「なにしてんだ？先に船に戻ったと思ったのに」

「いや…ちょっとかぜにあたってただけだ」

そうかとバスケットは言ってさっさと帰るぞとシップに戻った

ジャケットが生きてた…

そんな事を思いながらキングはシップ乗り込みパルムを後にした

あいつ達はどこにいる？（後書き）

実はジャックが自分の中でお気に入りです。ささ話に出したい！  
と思います

今回無理やりいれました。早めにジャックのはなしを書きたいな。

その刀の名を…

「なあキング、まえから気になってたんだが…」

「あゝ？」

そう語りかけてきたのはバスクだった。キングはカフェで昼食中。そこにバスクが来たのだ

「その刀どこで手に入れた？」

その刀とはいつもキングが背中に縛り付けている太刀のことだった

「今の時代はフォトン一色だし、鉄系の武器を作っているとこなんて見たことがないんだ」

キングが口の中にたらふく詰め込んだご飯を飲み込むのを待った

「あゝうめえ、全くもってうめえ」

「なあ聞いてるのか？」

「なにが？」

バスクはハア。とため息をついた。食べることに夢中で話を聞いていなかったらしい。  
もう一度同じ事を一語一句こぼさず話した

「こいつか？こいつはだな。ジジイから貰った」

「そのおじいさんは鍛冶屋でもやっているのか？珍しい」

「ああ、まあ昔の話だ。そんなときにもフォトンがあったのに一切使  
いやがらなかったよ。」

「ほんと、よくわからねえジジイだったよ……」

『男女云々の話じゃあねえ。ただテーマが決めた事は死ぬまで通すつてのが筋ってモンなんだよ』

「おい、キン。ちょっとこっちに来てみるや」

「なんだよ」

言われるがまま老人に近づいた。ここは村の唯一の鍛冶屋。武器を使うのは4人しかいないのだがこの村にきてからずっと鍛冶屋を営んでいる物好きな老人だった。

そこには弟子などはおらず、作業場とその老人しかいなかったためたまに遊びに来てくれるキングの存在はなかなか嬉しい物らしい。

「どつだよこの刀あ、いい獲物だろーが」

「刀って爺ちゃん…これほとんど巨劍ビックソードじゃん。んなも使えるやつなんていないって」

「バカヤロウ、キンが使うんじゃないかよ」

「無理に決まってるっての！」

そのススだらけの老人はもうほとんど趣味で刀を作っているような物だった

キングとこの老人の出会いは、アギロの家にキングが来てからまだ日の浅い時の事だった。

老人はアギロと大変仲がよく。週に一度のペースで晩飯時に酒を片手に現れる。

「いいかぁキン。出来る出来ないの前にやるかやらないかってやつだ。やる前から無理っなんざいつてたらそりゃオメエそこから何にも生まれやしねえよ」

ほれやってみると、その巨剣を差し出す。わかったよと渋々受け取った

ドスンッ！

キングがその巨剣を持つにはまだ筋力が足りなかった。老人はケラケラと笑っている。

「…お？なんだそのVサインは？」

ケラケラと笑っている老人にキングは思いっきりピースをした

「2日！2日でこいつを振り回せるようになってやる！」

巨剣を持ち上げられなかった事がよほど悔しかったらしい

「おっそいつぁいい。だったらこうしよう。もしキンがコイツを使えるようになったら  
お前の望む刀をわしが鍛えてやるっ」

「マジだな！？絶対だぞ！？」

いままで自分の武器を作ってくれと言っても聞かなかったのが自分から作ってくれると言うのだ。  
このチャンス絶対ものにしてやるとキングは張り切った。

「絶対約束守れよー！」

そういつてキングは走って鍛冶屋を後にした

その後キングが巨剣を使えるようになったのは言うまでもない。

「邪魔すんぞアギロー」

そういつて老人は酒を片手にアギロの家に来た

「ん？なんだ鳳月の爺ちゃんじゃないか、どうしたこんな時間に。晩飯はとっくの昔に終わったぞ」

今の時間はもう夜中、アギロ以外は皆寝ている。

「なあに、今日は報告にきただけなんだよ」

そういつて椅子に座りコップに酒を注いだ。

「どうした報告って」

アギロも椅子に座り差し出された酒を片手に聞き手に回った。

「実はな。次の刀で鍛冶屋を終いにしようと思っているんだ」

「へえ、畳んじまうのかい。あれほど刀鍛冶が好きだったのに」

「キンから話は聞いたか？刀鍛えてやるって話」

「ああ、あれか、キングのやつ大はしゃぎしてたぞ」

刀を鍛えてもらえると眠りにつくまではしゃいでいたキング。思い出し笑いをしたのか笑いがこらえられなくなったアギロ。よほど刀を鍛えてもらえるのが嬉しかったらしい。

「で、それと店畳むのに関係でもあんのか？」

「ああ、あるかもなあ」

のんきに笑いながら言った鳳月

「実はなわしの命、もう長くはない」

酒を飲んでいたアギ口の腕が止まった。

「むかしっからの病だ。もう逝く時間が迫ってるい」

「だから最後に生涯をかけて研究した一本の太刀を鍛えて終わりにすらあ」

以前としてニコニコしている鳳月。なぜ平常心でいられるのだろうか

「で、その太刀をキングに？」

そうだと頷いた

「そりやまたなんであいつなんだ？いままで一本も刀を鍛えてやらなかったのに」

「キンしか扱えない代物だからだな」

「太刀に使う素材は。ヘビーマタルにオリハルコン。それから重純  
鉱石だ」

これらの素材はどれも高級かつ、とてつもなく重い金属だった

「よくそんな良いもん揃えたなあ」

関心しているアギロにまだあるぞと鳳月は続けた

「属性石（雷）だ」

「属性石だと!?!」

属性石はフォトンがまだなかった頃に属性をつける為の石で、もう今ではほとんど取りつくされた物。

「そんなに一級品のもんをキングに…」

「いいか、アギロ。キンの力をあなどつちゃあならんぞ? 2日であの巨剣を持てるどころか振り回すまでになったんだ。おそらく、あいつにやあなにかある。そんな光る原石のためだいいモンを鍛えてやらんとなあ」

そういつて鳳月は立ち上がりじゃあなといつてアギロの家を出た。

「ほらよキンこいつがお前の刀だ大事にしるよ」

そういつてキングに長い太刀を手渡した。キングの身長のは2倍はあ  
る太刀だがキングは文句はつけなかった

「うひゃあ〜スゲエ爺ちゃん！あんがと！」

目をキラキラと輝かせて太刀を見ている。興味心身の顔でジャック  
が近づいてきた

「あ、キング。やっと自分の武器を作って貰ったんだな」

ジャックはすでに双小剣を作って貰っていた

「いいだろ〜がカッチョいいだろ〜が」

「うん、かっこいい、ねえねえ貸してよ」

キングは自慢げに太刀を差し出した。

その太刀を持ち上げられなかったのは言うまでもない

「なにこれ重ー！」

「ギャハハハハ！ダッサイのー！んなモンも持てないのかよ」

そういつてキングは太刀をヒョイっと持ち上げた

「いいかキン、そいつはコクイントウって名前の太刀だ。そいつは生きている。お前を主と認めたら。そいつはもっとキンに力貸してくれっからな」

キングの顔が曇った

「名前。コクイントウか…爺ちゃんの名前入れて言い？」

「ん？そりゃまたなんでだ」

「そりゃあ生涯かけて研究した太刀なんだろう？つてことは爺ちゃん  
の全てがこれなんだ。  
だから名前入れさせて！」

アギロの野郎…バラしやがったな

そう思いながらなぜか嬉しくなった鳳月。

「嬉しいこと言ってくれるじゃあねえか。好きにしな」

「じゃあこれからこいつの名前はコクイントウ・ハウズキ。だな！」

「ギヤハハハハ！いい名じゃあねえか。」

ったりまえだ！そう笑顔でキングは返事をした。

次の日役目を終えたように鳳月は息を引き取った。

「こいつには大事な思い出が詰まってるんだ。俺の一生の宝モンだ」

「そうか、だからそんなに大切にしてるんだな」

「ったりまえだ！肌身離さずもつときてえ」

バスクはふと、空港のことを思い出してしまい笑ってしまった。

「でな、キングもう一つ聞きたいことがある」

「なんだよ」

「いつまでその服でいるんだ？」

その服とはクラウチから貰ったダルンダルンの服だった

「ああ、新しいのが来るまでだな」

「あゝあ、クラウチめ、忘れてるな。俺から言っておいてやるよ」

「おおまじでか、じゃあ頼む」

ああと言ってバスクはカフェを後にした

「爺ちゃん。俺はあんたのこと、絶対忘れねえぞ」

彼の生涯を費やした太刀。

彼の形見でもある太刀。

その刀の名は

コクイントウ・ホウズキ

その刀の名を…（後書き）

実はコクイントウは自分が使っている武器でもあり、手放せない武器なので

登場させました。あ、勿論。ファンタシースターでの話ですけどね

## 狙われた小さな男

「やっぱりいつ来てもいいなあ、ここは」

今キングは、ニューデイズの静かな森丘に来ていた

自然保護団体といった自然を守るための団体のお陰でこの自然が生きている

その自然に満ち溢れたこの星が大好きなキングは、暇があればニューデイズに来ていた。

温かい風が心地いい。辺りには緑しかない。音も風と鳥の鳴く音しか聞こえない。

「さて、帰るとすつか」

満足そうな顔でキングは立ち上がった。新しい服を調達してもらい。上機嫌で帰ろうとした

「オイ」

誰かがキングを呼んだ。振り向いてみると

あ…

そこには忍者のような姿をしたジャックの姿があった。前ときはフードをしていたが今は蒼い綺麗な長い髪が風でなびいていた。

「ジャック…か？」

少し驚きながらキングは確認した。ジャックは悲しい目をしながらコクツと頷いた

「…ひさし振りだな…キング」

ジャックの声はまるで泣いているかのような声だった。

「なに言ってるやがる。つい最近あっただろーが」

そうだったなと笑みを浮かべてくれた。しかし悲しさは抜けていない。

「あの時は…すまなかった…」

「どうしたんだよお前…まるで別人だぞ？10年前はもつと…」

「今日は昔話をしに来たんじゃないんだ…」

ジャックはキングの話の遮って話を続けた

「俺たちの会社は…キング、お前を…」

ジャックの体が震えている、何があったのか分からず、ただキングはひたすらジャックを見つめた

「お前を…暗殺の標的にした」

「暗殺？ いったい何の話なんだ」

キングは混乱をしていた。

「俺は…あの戦いのあと、ある男に拾われた。俺を助けるためじゃなく、利用するために…」

ジャックはうつむきながらこらえる様に話した

「逃げてくれっ！どこか遠い所に…俺たちに見つけられないところに…」

「キング…お前には…」

「感動の再会の途中にすみません」

そつ話を遮ったのは冷たい笑みを浮かべた長身の男だった

「ジャックさん、それ以上の干渉は unnecessary ですよ、下がってください」

ジャックは言われるがまま男の後ろに退いた。

「おや…ジャックさん貴方…涙を流しておられるのですか？」

キングはジャックの顔を見た。透けるような肌に透明の涙が流れていた

「心をなくした貴方が涙を流すとは…よほど大切な方なのでしょうね  
え」

男は不気味に笑っていた

……

「さて、もう用は済みました帰るとしまししょうか」

男は始末しておけと指示するところからともなく、大勢の忍者が現れた

「行きますよ、ジャックさん」

そういつて二人は消えていった

「我等は5番隊、鳴<sup>シキ</sup>なり、お主の命、貰い受ける

……………お前等か……

キングは目を開けたまま瞬きをしていなかった

「覚悟！」

一人の忍者がキングに向かっていった

ガン！

その忍者はキングに殴り飛ばされた

「お前等かって聞いてんだ！ジャックをあんなふうにしやがったは  
！」

鞘から太刀を抜いて棒立ちになっているキングの目は怒りがあふれ  
ている目だった

「ゆゑねえ…ゆゑねえぞおおおおお！..」

辺りは敵の血であふれていたそこに立っているのは返り血を浴びた  
キングだけだった

キングはまだ息のある敵の方にいき、胸倉をつかんだ

「ジャックはどこにいる」

酷く恐ろしい目をしたキングに恐れるものと反抗をした

「そんなやつ…しらん…な」

キングは男を片手で頭上に持ち上げた

「ガハッ!!!」

「どこにいるんだって聞いてんだよ。さっさと答えねえか」

拷問のようなことをしてやっと場所を吐いた男は息をしていなかった

。。。。

「おつどつしたキング…ってどうしたんだその傷！」

キングが通信をした相手はクラウチだった。クラウチは通信越しにもかかわらず大きな恐怖を感じた

「すまねえがちよいと休暇をくれ、やることがあるからよ」

「おい、やるじやって…その前にちりょつを…」

キングはクラウチの話を聞かずに、通信を切り、ジャックのいる場所  
所に走っていった

狙われた小さな男（後書き）

はい、つぎから長編に入ります、長いことやろっかなー

## 運命と共に生きる暗殺者（前書き）

投稿遅れて本当にすいません。く用事事がやっと終わりました…そんなときのためにも、ストック作っとくべきだった

## 運命と共に生きる暗殺者

ここはアシュバル地方。ニューデイズの北にある地方で、ニューデイズの美しい自然とは対照的に荒れ果てた地しかないとこだった。

「…んな所に、基地だのなんだの作る奴の気がしねえ…」

いま、キングの目の前には高く聳え立つビルがあった。そのビルは不気味に光っていた。まるで生きているかのようだ。

「あんなかにいる奴は、皆殺して決定だ」

キングの独り言。独り言がはげしいのは、キングが怒りの状態であることが分かる。

『認証を行います。カメラの前に立ってください』

当然の如く、ビルの入り口にはセキュリティが張られていた。入り口に立つと、どこからともなく声が聞こえてきた、それは認証のための促しだった

「あいにくだがそれにやあ従えねえな」

セキュリティに話しかけるキング。機械と地声の判断がつかない位まで煮えたぎっている様だ

「まどろっこしいことは大嫌いだ、邪魔するぜ」

ドカンと大きな音がした。セキュリティやその他もろもろを破壊し、ドアをこじ開けた

中は何事もなかったかのように静かで不気味だ

「…なんだ？だれも気づいちゃあいねえのか？」

好都合だと鼻で笑い足を進めた

中は綺麗に掃除の施された廊下のみ、その先には一つのドア。進む道は一つしかない。  
キングはそのドアを開けた

「…なにしてんだ？」

キングが問いかけた人物は、忍者のような服を身にまとったジャックが立っていた。

周りは何もない広場のような部屋と二人のみ。しばしの沈黙が続いた

「…最後の忠告だ」

口を開いたのはジャックだった。その口調は前回のジャックとは比べ物にならないくらいのも  
真剣な口調だった。

「お前には死んで欲しくない、失いたくないんだ。退いてくれ」

「馬鹿か、なんのためにここに来てると思ってるんだ。ここの連中を皆殺しにするのもそうだがあ  
お前を連れ戻しにきてんのでもあんだよ」

それになあと、頭をかきながら話を続けた

「あんな連中に、俺が負けるとでもおもってるのか？」

義兄弟だったのでキングの实力はジャックも知っていた。

「わかってる…お前の力は昔からよく知ってるさ、今も…」

ジャックの顔が曇った。ジャックは武器を手に取った

「どうしても帰ってくれないって言うなら、力づくで帰ってもらおう」

キングはニヤリと笑いながら太刀を鞘ごと背中から外し、後ろに置いた。

「…なめてんのか？今の俺は本気だあの時とは違っぞ！」

「うるせーよ、男が男をしるにゃあ、死合っしかねえってな」

キングは指をポキポキと鳴らせながら話を続けた

「今のお前は何か隠してるし、迷ってる。そいつを聞いたって当然お前はこたえねえだろーが  
言葉で伝えにくかったら、テメーの拳で語りかけてこいや」

ジャックはためらうことなく武器を捨てた。

「いいのか？素手なら、お前に勝つ自身はあるぞ？」

流拳を昔から習っていたジャック。その上、暗殺の技術もみ磨かれている。

それに対してキングは素手というとき喧嘩程度。素手での腕はジャックの方が上だった

「いくぞ」

一言つぶやいた後、ジャックはすぐにキングとの間合いを縮め、正拳突きをはなった

「がはあ！！」

キングの腹にもろはいった

ひるむキングに容赦なく流拳の攻撃を繰り出すジャック。

それをかわすことが出来ないキング

勝利はジャックに傾いた

バシ！

「へへ…捕まえた…」

キングは体から血を流しながらも、何とかジャックの攻撃を防ぐことが出来た

「まだまだだな、あいつかわらず力がねえんだからよお、痛くもかゆくもねえっテンだ」

ジャックは間合いを取ろうとするがキングはジャックの手を離さない。離れない

「で？お前はどつしたいんだ？本当は、ここから逃げ出したくてたまらねえんじやねえの？」

図星のジャックは少し戸惑いを見せる。その様子を見てキングは確信し、さらに問いかけた

「ならなんで逃げたりしねえ、なんであの男の言われるがまましがってる？正直に言ってみろ」

ジャックはうつむきながら口を開いた

「裏切ったら…大切な物を奪うってシゼーレに言われた…」

シゼーレ？とキングは一瞬疑問に思ったが、あの男。ということが

すぐに分かった

「…で、その大切なモンが俺と兄キってか？」

ジャックは小さくうなずいた

「よく言うぜまったくシゼーレって奴は、もう俺の命狙ってんじやねーか」

そのとおりだとジャックは言った

「だったらなんでまだ従う？約束をあっちから破られたんだ、なんでまだ従おうってんだよ」

「…運命だからだ」

運命だあ？ハテとキングは問いかけた

「これは俺の運命だ、だから俺は運命を受け入れたんだ。運命から逃げない、運命と共に生きる  
そう決めたんだ」

ケツとキングはつばを吐き、ジャックに話した

「そりゃあ結局、逃げのと同じじゃねえか。これは運命だから仕方ないって、抗うことから逃げてんだよ。  
逃げてても逃げてても、結局、そいつはまた追いついてきやがる。その繰り返しだ。  
そんなのとならいつそ抗いな」

うつむくジャックに最後に一言ささやいた

「いいか、運命を変えるために戦うのもまた…運命だ」

ジャックは思いつめるようにしたを向いている。しばらくするとキングの手を振り払い、逃げようとした。

すっかり力を抜いていたキングは軽々と手を振り払われた。

「ッ！！待て！！」

逃げるジャックの手をつかもうとしたが、あと少し届かずジャックは闇に消えていった



運命と共に生きる暗殺者2（前書き）

最近とっても忙しいです…11月は嫌いです。資格取らないといけ  
なかつたり

製図や課題をしないといけないし…あ、こっちの話でしたね  
とーもスンませんでした

## 運命と共に生きる暗殺者2

「…………… 妙だな」

ジャックの姿を探している途中につぶやいた

ここまでできて立ちほだかったのはジャックのみ、後は何も無い。流石のキングもこれはおかしいと気づく。

あれからどれだけ進んだだろうか。窓の外を見る限りかなり上まで来てるみたいだ。

このビルは全てが同じような構造になっていた。狭い廊下がありその先には広い部屋。そこを抜ければ階段。その続きであった。

「……………」

キングの足が止まった。

「よーやくおいでなすったか。いいぜ、でてきなよ」

その声と共に3〜4人の忍者が現れた

戦闘の構えを取ろうとしたら、どこからか声がした

「こんにちは、キングさん」

その声はスピーカーカーからの声だった。その声の主は背筋が凍るほど不気味な声だった

「ようこそ私たちの会社へ。今まで何もなくてさぞ暇でしたでしょう」

「ふざけんな、弟と戦わせたくせに」

「弟…ジャックさんですか、最近勝手な事をよくしますねえ」

応答したのでたぶんどこからか見ているのだろう

「まあそんなことはどうでもいいのです重要なのは今。貴方は命を狙われている身。剣を抜かなくてよいのですか？」

「アホか、こんな狭い廊下じゃ、太刀を振ることすらままなるかよ」

今いるのは狭い廊下。あれだけ長い太刀は振ろうとすると壁に当たってしまうのだ。

「おやおや、戦場での頭の回転には驚かされますねえ。いいでしょう、攻撃を許可します。任務を開始しなさい」

その命令と同時に忍者達が襲い掛かってきた

素手対武器。この時点で不利だが、それに加えて素手のキングはジャックにも劣る。ちゃんとした流派でもなんでもないからだ。

それを見越しての采配を男はしていた

「チツ！テメーら、堂々とたたかわねーか」

近戦武器二人と遠距離武器二人の組み合わせ。遠距離の攻撃をかわしていたら、近距離にやられてしまう。これでは攻撃どころか、防御すらままならない

攻撃が最大の防御のキングの攻撃を封じられたのでは勝ち目がない

「覚悟おおお！」

足を崩したキングにすかさず攻撃をしようとする

「任務…開始…」

聞こえるかどうか分からない声が聞こえたと思うと。襲ってきた敵がやられていた。

「…ジャック」

そこには蒼い長い髪をなびかせたジャックの姿があった。

「運命と戦うことを決めたよ。キングのおかげだ」

ジャックの顔は澄み切っていてようやく笑顔が見れた

「あんどときと…同じ顔だ…眩しくっていけねえ」

攻め続けられたキングはひざをつき、肩で息をしていた。

「キング、お前は少し休んでくれ、いざという時に。それから、俺の成長した姿。見てくれよ」

二カツと歯を見せながら笑うジャック。今までのジャックはどこにいったのやら。

「ジャック！貴様裏切るつもりか！」

一人の忍者が大声を張り上げた。その声と同時に、鋭い目つきに変わるジャック。

「馬鹿。もうこっちが裏切られてんだよ。従う義理がどこにある」

忍者はその声を聞き、戦闘の構えを取った

「いぬー」

「きな」

ジャックの戦う姿を見てキングは見とれてしまった

その姿は戦うというより、ほとんど舞いだった。

音も立たせずに静かに敵を倒した。

「任務完了っ」と

ジャックはキングのほうを向いてまた澄み切った顔を見せてくれた

「…驚いた。成長したな」

「蝶のように舞。蜂の様に蝙蝠のように闇に溶ける。だ」

難しいことをペラペラと喋りたくるジャック。ジャックの悪い癖だ。誰もがその難しいことを知っていると思いでしまう。

「あのな…なにいつてっかわからん…」

無知なキングには何を言っているかわからないのは当然、このやり取りはもう何回繰り返しただろうか

「細かいことは気にするな」

「細かいこと言い出したのはお前だろ」

二カッと笑うジャックに細目で突っ込むキングこのやり取り。とても久しぶりだ。

キングは思わずにやけてしまった。

「さて、俺等の進む道は決まった。シゼーレを倒す。」

「誰だよそれ」

「細かいことは気にするな」

「だから…もういいわ」

あきれながらキングはジャッククについて行った

運命と共に生きる暗殺者2 (後書き)

シゼーレはさっきから行ってる不気味な男のことですはい。

運命と共に生きる暗殺者3

「アホか！それ何回聞かせるつもりだ！」

「馬鹿。ちゃんとしとかないとなにもわからなくなるぞ」

「だーかーらー！ここの構造はもう分かったから！！」

狭い廊下に、大きな怒鳴り声が響く。

「いやだからなこころはこーなって…」

構造図を広げて説明するジャックとそれを適当に聞くキング。この光景はめずらしいものではなかった

「でな、ここをこーいけば……聞いてる？キング」

「あ……」

「いいから続ける、コイツにかまっただら話が進まん」

「んだとう!?!」

いま、アギロ、ロウ、キング、ジャックで作戦会議中。いつもの如く、ジャックが作戦を立てて  
キングはそれを適当に聞き、ロウがケチをつける。

「大体お前は自重してもんを知らん……」

「なに?次長?お前は平社員でもなんでもないだろーが」

「自重だ自重!そんなんもわからんのかお前は!戦い方といい普段の生活といい……まるで猪だな」

「んだとテメー！表てんかイイイ！」

「やるかコラ！猪の煮込み汁にしたんぞコライイ！！！」

「じゃかつしゃああああい！！！」

アギロの重たい一撃。この展開はいつものこと、これを見てジャックはクスクスと笑う

「いつになったらお前等は静かに出来るんだ全く…ジャックを見習え！」

ほめられたジャックはどや顔をして二人を見る。ここで二人の何か切れるのは当たり前。

「しばくぞくからアアアア!」

「猪の煮込み汁にすんぞゴライ!」

「まてまて猪の煮込み汁は俺にするんだろーが、なんでジャックにすんだゴライ!」

「あ…ミスった…ゴライ」

「ぎゃははは、ばーがばーが」

ぎゃははとロウを指差しながら大声で笑うキング。

アギロがプルプルと肩を震わせる。



「…とまあこんなもんだ、分かったか？」

「あー分かった分かった、もう何回も聞いたから覚えたっつての」

頭をぼりぼりとかくキング。そんなキングを無視して新しい話をし  
てくるジャック

「次は奴等のパターンだが…」

「もういいって…！」

「みる、お前が訳わかんねー話しまくらからまた広場に来ちゃった  
じゃねーか」

「だからな……」

いままでの空気が変わった、その空気に気づいたのはジャック、ま  
だ気づいてないキングはグダグダ話していた

「だいたいな、お前は昔っから…ゴフっ」

ジャックが真剣な眼差しを前に向けたまま、横のキングにチョップ  
をかました。

「なにしゃがつ…あ？」

チヨップを食らったキングもそれに気づく

「こんいちハキングさん、それから…ジャックさん」

背筋の凍るような声、シゼーレという男だった。そしてその男の前には長銃スナイパーを構えた忍者が多数いた。

「なんのまねだ…？」

ジャックの目が怯えてる。キングは察した。

「なんのまねもなにもないですよ、貴方が私を裏切ったのです。だから貴方の大切なものを奪いに来ました」

「ふざけんな、テメーからこいつ裏切ったんだろーが。裏切ったも糞もねーってんだ」

「はて、なんの話やら」

しらをこくシゼーレ。その笑みは変わらず不気味だった。

「まあそんなことは…おや？」

凄い速さでキングが敵に切りかかった

「さっきからのほほんとしてやがってウットーシーンだよボケっ」

さっきまでのキングはどこにいったのやら。ジャックも参戦すべく武器を取る

「フフ…<sup>ハンドガン</sup>拳銃隊、射撃しなさい」

その命令と共にキングの背後からハンドガンをもった忍者が現れた

「ジャック!!」

キングの叫び声とともに銃声が聞こえた

運命と共に生きる暗殺者3 (後書き)

いいところでくぎりました。ケケケ、意地悪な俺です(笑)

## プロフィール(前書き)

今サラッすが登場人物の自己紹介をします。

新しいこと(あたらしいキャラなど)があったら更新しますんで  
ちよくちよくみてくださいね

## プロフィール

キング

年齢：20歳

性別：男

種族：ビースト？（身元が分からないため体質がビーストと似てるので国籍上ビースト）

身長：130cm

体重：34kg

武器：太刀 コクイントウ・ホウズキ

性格：凶暴、馬鹿

姿：金髪・ツンツンヘヤー・赤黒い肌・猫のような目・鋭い目つき

長所：礼はしつかりする。飯は自分で作って後片付けする。

短所：鈍感・世間知らず・キレジ

備考：チビに過剰反応を起こす。なかなかの男前、だが子供と見られるため

子供にはいかつくはない？とビミョーな所にある。

身元不明のため、自身も知らないなにかがあるかも

ジャック

年齢：15歳

性別：男

種族：ビースト

身長：132cm

体重：30kg

武器：双小剣 暗殺用消音方双小剣

性格：お淑やか、天然

姿：蒼髪・ストレートのサラサラヘア・透き通るような白い肌・蒼深い目

長所：知識豊富。協調性

短所：難しいことをペラペラと喋り倒す。どや顔。

備考：キングの義弟。ジャックが産まれた頃にはもうキングがいたのでキングの弟。その姿

からよく女性に間違われて、キングと一緒に歩いていると

よく恋人同士に間違

われることがあった。

頭はとてもいいが、天然がたまに入る。

## ロウ

年齢：???

性別：男

種族：ビースト

身長：178cm

体重：65kg

武器：双剣 ジントウ・ハウズキ

性格：物静か。冷静

姿：黒髪・ナチュラルなショートヘア・少し焼けた肌・茶色の目

長所：手先が器用、親しい

短所：毒舌、挑発に乗りやすい

備考：ヒトを人一倍嫌っていた。そのため、ヒューマンだったハウズキと打ち

解けるのに一番

時間がかかった。現在行方不明

## アギロ

年齢：58歳

性別：男

種族：ビースト

身長：170cm

体重：83kg

武器：巨剣 霸王粉碎・鳳月

性格：明るい。親父肌

姿：白髪・ツンツンヘア。少し焼けた肌。優しい白い目・筋肉質

長所：人情深い、一途

短所：ものすごい不器用

備考：姿がビーストの象徴の様。人情深く、村人は家族。

100年戦争で人間に一番恐れられていた男。戦死。

## 鳳月

年齢：72歳

性別：男

種族：ヒューマン

身長：165cm

体重：81kg

武器：無し

性格：陽気

姿：チヨイはげ・バサバサした白いひげ・作業服姿・ススだらけ

長所：刀鍛冶の天才

短所：フォトンなどを使わない頑固ジジイ

備考：生まれた家が刀鍛冶屋だったため鍛冶の腕は確かな物。ある事件に関わった人物で、その事件をきっかけに家をでてアギ口達と出会った。キングが大のお気に入り。キング自体も鳳月がお気に入り。

### シゼーレ

年齢：??

性別：男

種族：??

身長：??

体重：??

武器：無し

性格：冷静沈着

姿：魔女の帽子のような物をかぶってる・漆黒のマント・痩せている

長所：先読み

短所：行動の8割が不気味

備考：性別以外ほとんどなにも不明な男。最近異常なまでにキングを狙っていたが。刑務所にいたため

最近狙えるようになった。その不気味さは実はコンプレックス。

ル

I・チエン

年齢：18歳

性別：男

種族：ヒューマン

身長：170cm

体重：67kg

武器：棍 電乱撃棍

性格：活発。熱血漢

姿：いかにもカンフーって感じの服装・綺麗な筋肉・ポニーテール

長所：忠誠心・乱戦に強い

短所：常にやかましい

備考：その忠誠はジャックのみでほかの目上の人にはあまり忠誠を誓わない一途。チロとの喧嘩率は90%。

### チロ・ミーヤ

年齢：12歳

性別：男

種族：ニューマン

身長：120cm

体重：29kg

武器：扇 僕天才

性格：ちよつとだけお淑やか

姿：フワツとした白い服・柔らかいショートヘア・茶をいつも

片手に持っている

長所：頭の柔軟さ・気配を消せる

短所：一回に喋る量がハンパない

備考：とても憎たらしい口調で話しかけることがたまにあるがなぜか憎めないフワフワしたやつ。

ジャックが隊長の肩書きを完全に捨てたときにジャックくんといきなり呼んでいるが

実は仲良くなったその日からそう呼びたくて呼びたくてしかたがなかった。

リカルダ・サン・ネイル

年齢：26歳

性別：女

種族：ニューマン

身長：174cm

体重：42cm

武器：鞭 皮の鞭

性格：妖しい

姿：キャバ嬢でも想像してください・黒中心の青紫の着物

長所：姉肌・面倒見のよさ

短所：誰でも子供あつかいをしてしまう

備考：ここでは実はいちばんの古株。ジャックがくるまで3番隊の隊長をしていたが、つかれたのでジャックに任せた

チロ・ジャックが一番のお気に入り。ちょっと変わったル  
ーを相手して新鮮な味わいを感じるのが癖。

以前、シゼーレにも、坊やを使ってしまい。シゼーレはえ？  
っと情けない声を出してしまった

この後、シゼーレが赤くなっただのは内緒の話。

プロフィール（後書き）

いまはこんだけですが、どんだんのせていきます

（11月10日）

そついや、シゼーレ忘れてたので今乗せました。

（11月12）

新しいのが3人もきました。かくのしんどっ

（11月13日）

鳳月の旦那を載せるの忘れてたああああああ

（11月17日）

運命と共に生きる暗殺者 4

「ジャック!!」

キングの叫びと同時に銃声が聞こえる

また…失くすのか…親父の次にジャックまで…

バタッと倒れる音がした

「…あれ？」

ジャックは立っていた。ジャック自身も驚きが隠せない様子。撃たれた跡がないか確認するため体中を触りたくっている。

「……援軍ですか？」

眩しい…？いや、そんな眩しい光なんて…

キングは後ろを振り返る。

そこには双拳銃ツインハンドガンを構えたクラウチと。長杖ロッドを怯えながら構えている一人の少女がいた

「…クラウチ？」

「よおキング」

ジャックには何が起きているのかが分からない様子。クラウチは話を続けた。

「あのなあ、休暇がほしけりゃ、ちゃんと書類なりなんなり書いてくれよ全く」

のん気に話すクラウチ。待てと手をだすシゼーレ。シゼーレ自体も予測がいの事が起きている。

「なにのん気に話してんだよ、今の状況わかってる？」

「おまえさんがズル休み中ってか？」

「違うわー!!」

盛大に突っ込むキング。冗談はここまでだといって、視線をシゼーレに向けた。

「おまえさん達が、うちのガキをズル休みさせた野郎は」

「だからちがうっていったらーが！大体。お前のガキになった覚えはないって！」

キングのツッコミを無視して話を続ける

「アホか、もうおまえさんはうちの社員ガキだろうがよ」

それに、とクラウチは話を繋げる

「おまえさん達の事は通信機器を使って全部見させてもらった。おまえさんら、苦労してんなあ」

ジャックの頭にポンと手を置いてから前に歩いていった

「うちのガキをよくも苦しめてくれたなあ、心身共に。」

手をポキポキとならしながら歩き出すクラウチ

「おまえさんら、親父の義務ってなんだと思うっ？」

そいつの答えはなあ。と言いながら銃を敵に向ける。

「ガキンチヨ守ることだ。テメーのガキを守れねえ親父がいてたまるかよ」

クラウチは銃を構えている敵をことごとく撃っていった。その速さはまるで雷が敵に向かって走っているように見えた

「おらぁ！エミリア！ポーっとしてねえで援護位したらどうだ！」

わかったわよ！とビビりながらも大声を上げた少女。

「…あいつは、あん時の小娘か」

キングは思い出した。レリクスで助けた少女。その少女がそこで戦っていた

「へえ、エミリアって名前か、あの小娘」

ん？とキングは首をかしげる。

「眩しい…？」

エミリアから光は放たれていない。なのになぜか眩しい。

…なた…わ…しが…る…すか？

「あ？なにいまの…」

いま、確かに誰かの声がした。優しい。母のような声

「ククク…よくもやってくれましたねえ…」

シゼーレが不気味に笑う。その目は今までジャックも見たことがない目をしていた

「あなた方がここに来るのは誤算でした。ですが必ず皆さんを葬って差し上げますよ」

でわ、と会釈して、消えていった

「あーあ、あの野郎にげちったか」

敵を全て倒したクラウチが言った。キングはクラウチに近寄った

「なあ、なんで俺がここにいるってわかった？」

それはなあとひげを触りながら自慢げに話した

「おまえさんが持つてる通信機器、実はそいつにはGPSってのがついてんだなこれが」

何だそりゃと首をかしげるキング

「それは、簡単に言うと、キングが今どこにいるか離れていても分かる機能だよ」

ジャックもキング達に近寄った。クラウチにぺこりと頭をさげ、助けてくれた礼をする。

「おっおまえさんがキングの弟君だな、キングの弟って言うんでどんなやつが出てくんだとおもえば  
しっかりした子じゃねーか」

ジャックの視線にまでしゃがみながら笑顔で頭を撫でながら褒める。  
まるで子ども扱いだった。

「あの…一応俺ももう子供じゃないんで…」

少し照れながらジャックは言う

「ちょっとおっさん！」

後ろからエミリアの声がした。なんだよとクラウチは立ち上がる

「あたしも助けたんだから少しは褒めたらどうなの!？」

んだよめんどくせえと頭をかくクラウチ

「あーすげえすげえ、エミリアはよくがんばったなーおっさん、うれしいよー」

「まったくうれしくないっ!」

感情のこもらない褒め言葉に思いつきりツッコムエミリア。

「…助かった」

スタスタとエミリアに近づいて礼を言ったのはキングだった。

「おまえたちが来てくれなかったらジャックを失うところだった。ありがとう」

「え…あ、ど…どういたしまして」

キングからいきなり感謝されたものだからエミリアは少し戸惑った

キングは。人間が嫌いな物の、助けてもらった時は心から感謝する。  
アギロの教えだ

「ま、小娘の割には頑張ったんじゃないの」

後ろを振り向き歩きながら言った。一言多いのがキングだ。

「ちよっ小娘って…」

クスっジャックが小さく笑う。

「さて、味方が4人、これはもしかしたらいけるかもしれない。」

ジャックが有利になったことを悟った。

「アホは、もしかしたらじゃなくて絶対だ」

キングは自信満々に言った。

その自信にはなぜか安心させられる。

「ちあいにじか」

4人はシゼーレを倒すために歩き出した

.....

「まだ、眩しい……なんなんだ？あの小娘」

運命と共に生きる暗殺者4（後書き）

結構長々とやっておりますね。もうそろそろ終わらせようかな？

**運命と共に生きる暗殺者5（前書き）**

今回はジャックの目線かつジャックの昔話から始まります

運命と共に生きる暗殺者5

「隊長おおおお!!」

鼓膜が破れるかと思うくらいの大声で俺に近づいてきたのは3番隊の仲間。ルーだった。隊のなかで俺を一番に尊敬してくれる忠誠のあるやつだった

「ルー…もうちょい静かに…」

「スンマセン隊長!!」

「だから静かに…」

もともと活発なルー。静かに闇に解けないといけないここでは普通生きていけないが。その天性の素質である棍ボウを使った棍撃。いわゆるカンフーといった技で、乱戦になったときにとても頼りになる奴だった

「隊長！なんで3番隊を降ろされたんスか！？自分、納得いかないっス！」

つい先日、俺は3番隊の隊長を降ろされ、単独で行動している。その命令にルーは納得がいていないようだ。

「知らないよ、シゼーレの命令だ、それが運命なら受け入れるしかない」

「だからって！！」

「だめよルー」

興奮するルーを止めたのは同じく3番隊の仲間。リカルダだった。

「この子がやつと真実を受け入れられるようになったのよ？今もその運命を受け入れようとしている。

私たちはこの子の決めたことを見守ってあげないといけないんじゃない？ねえ、坊や？」

「アネさんっ、いくら隊長より年上だからって隊長に向かって坊やはいけないと思うっス。

隊長は隊長っスからちゃんと隊長って言ってほしいっス。ねえ、隊長？」

リカルダ…その姿といい口調といい…本当に大人っていう雰囲気がかもしだしている。

なんというか…その…苦手だ。…ある意味で。

「ルーさん、珍しいですね。僕と意見が合うなんて」

…いつのまに横に座っていたんだろうかこいつは…

チロ。最近ここに拾われた子供。同じ拾われっ子ということで親近感ももててすぐに打ち解けられた。  
それを知っていたのか知らなかったのか、シゼーレはチロを3番隊に置いた。

チロの気配を消す能力はピカイチ。いつの間にかそこにいたり、いつのまにか消えたりできる。

俺を慕ってくれるのではルーと同じなのだが、考え方、性格が間逆の二人なので意見が食い違う事が多々あった

「大体、いままで大きな失敗も、ここに悪影響なこととしてませんし、第一、ジャック隊長は大儀を何回も  
だしていますからねえ。きつとなにかありますよ。」

そっぴいなながら茶をすすっている。

なにかあったっけな…そんな心当たりがある出来事は記憶にない。

「最近の事を思い出してみたらどうっすか？」

最近の事…

「あ…」

最近…キングを狙った。その後なぜか3番隊を外されたんだ

「隊長…？」

ルーはジャックの顔を見て、思い当たることがあったのが分かった。しかし聞けなかった。

「まっ原因がわかったのなら対策なんてもんは何個でも出てきます」

トンと椅子から少し飛び跳ねてチロは部屋を去ろうとした。

「ジャック隊長、貴方が行動に起こせば、僕はついていきますからね、勿論。3番隊みんなです」

それじゃ、と行ってチロは部屋を出た。

「…やっぱり、あいつの言うことは理解に苦しむっス」

正直、俺も理解に苦しんでる。リカルダさん…リカルダは分かったようでクスクスと笑っていた

「行動……」

「おーい、ジャック？さっきからなにポーっとしてんだ？」

声をかけてきたのはクラウチだった。今は俺が案内した部屋。つま

り俺の部屋だ。そこで作戦を練っていた  
まっいい案は一つもでてないけど

「ちょっと考えごとを…」

そっか、といって笑顔を見せてくれた。

「でだな、ジャックさつきから物スゴく、  
気になっている事があるだけだよ」

そういつてクラウチは視線を俺の横に向けた

「おまえさんの横にいる子…だれ？」

横にいる？……はあ。

そこにはいつからいたのか。茶をすすっているチロの姿があった

「チロ！」

その声にボケーっとしていたキング、エミリアが気づきチロに視線をやり…

「ぎゃあああああ！？」

「しおおおおお！？」

やっとの「ちろに気づく

「すみません、もうちょい静かにしていただけませんか？お茶を飲んでるんで」

「だれよこの子！？」

「あ…こいつはチロってやつです。俺の部下ですよ」

「部下？」

キングも初耳の事だった。

「うん。俺、3番隊の隊長だったんだよ。まあいまは単独だけど」

へっつと皆がうなずくなか、キングだけ首をかしげている

「…部下って…なんだ？」

「ま、いまとなつてはそんな肩書きは不必要。ジャック隊長…いや、ジャックは行動に移しました。僕たちについてはいくだけです」

そういつてチロは立ち上がった。

「馬鹿と姉さんがまっていますよ」

「たいちよおおおおお！！」

そう叫びながら飛び掛ってきたのはルーだった

「たいちよおおおおお！たいちよおおおおお！！」

「ちょ……まってくれ」

ルーが容赦なくほづりしてくる

「まったく。昨日まで会っていたのにまるで久しぶりにあったかのようね。坊や」

ルーにおくれて来たのはリカルダだった

「うお…」

クラウチはリカルダの姿に見とれていた。キングは…ボケーっとしていた

「リカルダ…いや、もう肩書きも消えて俺は普通の俺になった。リカルダさん」

「クスッ。なに？坊や」

ああ…なんでだろう、なんでかものすごく恥ずかしい…

「なんでもないです…」

「あら、なんだか別人を見ているかのような。」

顔が熱い。赤くなってるのが自分でも分かってしまう…

「え〜と。まず何から話しゃいいのかわからんが…」

頭をかきながらクラウチがこっちに来た

「まずは自己紹介でもしとくか。俺はクラウチ・ミュラーだこっちのがエミリアであそこでボーっとしてるのがキングだ」

「あら、丁寧にどうも。私はリカルダ・サン・ネイル。こっちの坊やにほづずりをしているのが  
ルー・チェンね。それからそこにいるお茶才飲んでいるのがチロ・ミーヤね」

「どうも、クラウチさん」

「…ああよろしく。チロ」

(いつの間によこにきたんだ…てかなんでこいつ茶あばっかのんだ?)

「さて、ジャックくんは襲われていますんで僕が道筋をいいますね」

「この構造は…たぶんジャックくんが嫌と言うほど説明してくれたからいいとして」

(なんでしってたよ…)

驚くキング。チロも嫌というほど聞かされたのだろうか

「シゼーレがいるのは恐らく最上階。悪役つてのは高いところがすきなんですね。

で、僕の案は。ここに僕たち3人は残ります。どうせシゼーレのことです。いままでは簡単に進ませて

最上階までこさせて、いままで兵を出さずに貯めていたのを後詰めに使い。殿兵と共に挟み討ちでも

しようとしていると思います。だから後詰め部隊をここで待ち伏せます。

幸いにもこつちには乱戦に強い馬鹿がいます…」

(どんだけしゃべるんだよ…)

ぺらぺらと喋りたくるチロはジャックに少し似ていた。なぜかキングはこそばゆくなった

「…とまあこんなもんですね。」

やっと終わったとクラウチがため息をついた

「さあ姉さん、馬鹿、行きますよ」

「誰が馬鹿つかコン畜生!!」

「それじゃあね坊や」

それぞれ別れの言葉を吐き。消えていった

「生きてくれよ…」

奴等には死んで欲しくない…でもあいつらが俺達を守るために3人で行った。俺は絶対にシザーレを倒さないと

「おめもつすぐそこだ。急いじつ」

運命と共に生きる暗殺者END(前書き)

今日で幻想を抱いた星達が1ヶ月経ちます。早いモンですね



緊張がいつきになくなったジャック。へー？とだらしない声を出す  
キングをみて他の二人もついに  
緊張が解かれた

「お…おま…この場面でクシャミなんぞ…」

笑いがこらえられずまともに話せないクラウチ。真剣だった眼差し  
がいまでは涙目になっていた

「はあ…ま、緊張し過ぎるのもいけないってな、いい方向に考えよ  
う」

ふーっと息を置いて落ち着くクラウチ。さっきからポケットとして  
るキングにジャックがチヨップを  
かまし、再び集中した

「いくぜ？」

「なんで何もなかったかのよう先頭に立てるんだか…」

先頭を切るのはキング。ほんとに戦場では頼りになる奴だ。とジャックは笑みを浮かべた

「お待ちしておりましたよ。みなさん」

その声は相変わらず不気味だった。この空間は今までとは違い。木で出来ていた。

「一人か？」

この空間には4人とシゼーレしかいなかったのだ

「ええまあ、どこかの誰かさんに5番隊を壊滅されましたから」

ジャックがキングに視線をやる。俺か？とキングは首をかしげた。

自覚していなかったようだ。

「まあそんな事はどうでもいいことです。約束。果たすとしましようか？」

そういつて椅子からゆっくり立ち上がった。おのおの武器をとり、戦鬪の構えをとった。距離は10mほど。その距離を見計らい、すかさずクラウチが銃を撃った

シゼーレは落ち着きながら手を横に振った。

チュイン！

弾が弾かれた。

「なっ…どーゆーこった!？」

武器もなにも持っていないシゼーレが手を横に振っただけで弾が弾かれたのだ。

「…魔法だ」

ジャックが口を開いた。その言葉を知っていたのはシゼーレとジャックしかいなかった

「魔法？なんだそりゃ」

年長であるクラウチでさえ知らなかったのだ

「魔法っていうのはテクニクに似てるんだけど実は違って。自分の体内にある魔力っていうのを集中させて放つ攻撃なんだ。でもおかし…魔法を使えるやつなんて。もういないはずなのに」

「つりゃあああー!」

おおきな声を出したのはキングだった。それに遅れて地面から雷が上空に向かって走った。

「……………」

啞然するジャック。勿論クラウチ、エミリアも口を開けてキングを見ている。シゼーレはこの事を知っていたかのように笑っていた。

「できたぞ?」

「なんで出来るんだよ!」

「おいおい、嘘だろ?きつと雷のテクニクだって。なあエミリア?」

「ううん、あんなテクニク見たことないもん。第一テクニク用の武器すら持ってないじゃん!!」

混乱する3人。その声を掻き消すかのように大きな声でシゼーレが笑った。

「ははははは！キングさん有難うございます。これで私が仮定していたものが事実となり証明されました」

「なにいつてんだよこいつ？」

「キングさん。あなたはビーストなんてあまっちよろい人ではありません。あなたにはもっと力がありますよ」

「はあ？なにいつてんだよ。俺は列記としたビーストだっ！」

「ククク、そう信じたのならそれでよいです。ですが、ここで貴方には死んでいただきます。私の目的のために」

そういつて両手を大きく振った。すると一歩前に出ていたキング以外が見えない壁を作られ。分離された」

いま。シゼーレと戦えるのはキングのみ。

「目的？なんでお前の目的のために死ななきゃならねーんだ」

分離されたのに落ち着いているキング。後ろ3人はジャックのお陰でパニックにならずに済んだ。

「私の目的…それは。貴方の心臓を食らうことです」

「気持ち悪い」

不気味に笑っているシゼーレの目が赤く染まっていた

「あなたの心臓を食らい、私に足りない力を手に入れる！」

「…じゃあお前は、俺の目的のために死んでいけ」

そういつて太刀を構えシゼーレに向かって走り出した

「ジャックは返してもらおう！！」

シゼーレは指先に力を集中させ。闇の炎のような物を出し。剣の形を造り。応戦した

「素晴らしい。素晴らしいですねキングさん！！ぜひ私の力にしたい！」

「さつきからテメー気持ちワリーぞ！うせるやああ！！」

ギヤインと刃のぶつかる音がしてつばぜり合いになった。シゼーレは余裕の笑みを浮かべた

「貴方の力、見せていただきましたもう十分です」

そういつて片手を上に上げた

「堕ちなさい！」

手を振り下ろすと上から黒い雷が落ちてきた

キングに命中。

……失くすのか？キングを…

棒立ちになっていたジャックに声をかけられないクラウチ。

「以外にもあつさりでしたねえ。期待はずれですか？」

「!?!」

「うらあああああ!?!」

とてつもない雷を食らったはずのキングがシゼーレにアッパーを食らわした

「なんだこりゃ…力が入れやすい」

キングは両手を見ていた。キングの体には雷が帯びていた

「ばかな！？…まさか貴方の内なる力は…」

計算が狂ったのか。腰を抜かすシゼーレ。キングは笑顔を浮かべ拳に力を込めた

「ありがとよ、なんだか物凄い力を感じる」

拳の力をいつきに解き放った。

「しめーだよ」

ドゴン！！と大きな音がする。雷を帯びたキングの拳がシゼーレにあたり思いつきり吹っ飛んだ

戦意を失ったシゼーレ。それと同時に見えない壁も解かれた。3人共、キングに近寄った

「キング！大丈夫か？怪我はないか！？」

慌てまくるジャック。なんせあれだけ強力な魔法を食らったのだ。  
普通は生きていない。

「みてる。ピンピンしてらあ」

服は少しボロついたが。身には傷一つなかった。

「がはっ！叶いませんでしたか。私の目的…せめて…道ずれに…！」

そういつてシゼーレは。力を振り絞り、魔力を解き放った

辺りがものすごい炎で焼かれた

「あついでー！あついでー！」

騒ぎまくるエミリア。うっせえ！とキングが言葉をはいて上着をエミリアにかぶせた

「ぶっ！」

キングの上着がエミリアの頭を覆った

「いまそいつは濡れてるからな、ちったあましになんたる」

ニカッと笑うキング。この場面で笑顔になれるのはキングくらいだ

やせっしー…

すこし心が揺れたのが自分でわかったエミリア

「なんでそんなに都合よく濡れてんだ？また魔法か？」

熱そうにしながらジャックが問いかけてきた

「いや、ただの汗だ」

笑いながら答えるキング

……

エミリアのなにかが冷めた

「冗談言ってる暇なんざねえぞ、このままじゃ死んじまう！」

辺りはいまにも崩れそうになっていた。

「このままじゃ……」

キイイイイーン……

何かの音が聞こえた。クラウチはニヤリと笑った。

「キング、ジャック、エミリア！窓を割って飛び降りるぞ！」

「はあ！？何いつてんのよオッサン！」

「いいからきやがれ！キング。エミリアを頼む！」

ほいよと言って軽々エミリアを担いだ。

「ちょっと！はなしなさい！……！」

「いくぜー！」

勢いよく窓ガラスを割り。飛び降りた。

「きゃああああー！！」

ドン！！

「ナイスキャッチだ。バスク」

ニカッと笑いながらクラウチは言った。キングたちが落ちたのはバスクが運転しているシップだった

「バスクじゃねーか！？」

「ふふふ、なかなかいいタイミングだったろ？」

はははと笑うバスク。キングが勢いよく中にはいって、その後悲鳴が聞こえた

「助けるんならなんではじめっからこねーんだーからああああー！」

「はじめっから来てたらみんな死んでたぞ！だから殴るのやめろお  
おお」

あはは…と苦笑いをするジャック。クラウチは気にするどころか腹をかかえて笑っている

ドガアアアアン…

大きな音でハツとしたジャック

ビルが爆発したのだ。

「あそこにはまだ…」

ビルの中にはまだ3人が残っていたのだ

涙をこらえるジャック。

「なにがそんなに悲しいんですかあ？ジャックくん？」

え…？

隣を見てみると、いつものようにお茶を飲んでいるチ口の姿があった。いつもと違う所は血まみれになっている事だった

「チ…チ口…！」



下の方から声がした。下を見てみると皮の鞭で何とかぶら下がっているリカルダと、そのリカルダの足に必死でしがみつくルーの姿があった

「こらチロ！早くたすけてくれ！落っこちちまう！！」

「はいはい、姉さんだけ助けて、馬鹿は落としたかったんですけどねえ」

「なんかいったツかゴラアアア」

「なぐんにもないですよ、いまからひきあげますんで〜」

「ふう、助かったわチロ、ありがとね」

頭を撫でられるチロ。このときにはただの甘えん坊になるチロ。

「…で、馬鹿はなんで鼻血なんか出してるんですか？」

「深くは聞かないでほしいッス」

鼻血を出しながら遠くを見ていたルー

クラウチはまた笑いのつぼにはまった。

「ここに悪魔が…また一人消えましたか…ですが…これはこれでよかったですのかもしれない…悪魔は…この世に生きてはならぬ存在…ガハッ！」

そういつてシゼーレは砂になって消えた

辺りには黒いカラスのような羽が舞っていた

運命と共に生きる暗殺者END

**運命と共に生きる暗殺者END（後書き）**

長いはなしが終わりました。

戦闘シーンって書きづらいですね（汗

運命と共に生きる暗殺者〜その後〜（前書き）

今日はその後、について話を書きました

それから、新しい短編、書いてみました！

題名は…知ってる人は知っています。

見てみてください！それでなにか指摘がほしいです（Mか!?!）

運命と共に生きる暗殺者〜その後〜

「ほいおつかれさん」

いまここはリトルウイング。バスクのお陰で何とかビルから脱出することが出来た。

エミリアは家に帰ってきた安心で寝込んでいる。

キングは広場でそわそわしていた

「まあこれで面接みたいなのは終わりだ。」

「やっと終わったスか」

ん〜と座りながら上半身をのばすルー。

シゼーレの一軒で帰る場所を失くした4人。それを絶好のチャンスとでも思ったのか。4人をリトルウイングに勧誘していた。

もちろん、帰る場所がない4人は了承した。で、いまキングがここに来たときと同じ事をしていたので

「…ん〜しっかきなあ…どうすっかなあ…」

書類を閉じたファイルを棚に戻しながら悩むクラウチ。

「部屋のカードキーが1つしかないんだわこれが。…あそこに4人は厳しいしなんせ異性がなあ」

「異性…ですか？」

いつもの如く、茶をすすりながらのん気に話を聞いていたチロ。

「いやな、さすがに野郎3人の所に女1はまずいだろ？」

言わずらそう話すクラウチ。次のチロの言葉にクラウチは啞然した。

「え？駄目なんですか？姉さんがいたら。いままではジャックんのへやに4人で生活してましたけど？」

……………どういう神経してんだこいつら

「リカルダよ、お前さんどうもおもわねえのかよ？」

「?なにが?」

いや、なんでもないと苦笑い笑いをするクラウチ。

4人はずっと、衣食住をともにしてきた仲、もう今となっては家族同然なのだ。気にすることなんて微塵見なかった。

「じゃーそこらへんは、まあいいとして…問題は人数なんだよ人数。あそこに4人は絶対無理だ」

うーんと頭を悩ませる5人。口を開いたのはジャックだった。

「じゃー俺、キングの部屋いきます。」

そうきたかと頭の上に豆球を浮かばせるクラウチ。もともと義兄弟だから何も問題はない。

「うん、じゃあそうすっか」

「隊長は同じ部屋じゃないんすか!?!」

バンッと机を叩き怒鳴るル！。

「あのな…もう俺隊長でもなんでもないし…それに今までと違っていつでも会えるって」

「そーですよ馬鹿、なんなら馬鹿もキングさんのところ行きます？  
そうしたらやかましくなくなるんで」

「なにい!？」

まあまあとなだめるクラウチ。まあボスがいうなら…とルーから引き下がった

ここで雇ってくれる恩人なので敬意を表してボスとクラウチのことをルーは呼ぶ

「じゃあ、3人はこの部屋を使ってくれ。あいにくベットが1つしかねえし、2人は地べたにでも…」

「あらそんなことする必要ないわ、だって、一つのベットで3人が寝ればいいんですもの」

全く…こいつらの神経を疑うぜ…

3人はお世話になりますと一声かけて出て行った。

その時、チロの顔がやたらニヤついていたのを誰も知らない。

「あのクラウチさん」

3人は部屋に行ってしまったのでこの場にはジャックとクラウチしかいなかった

「俺たちがここにいることはどうか」

「心配はねーよ」

話を遮ってクラウチは言った

「ほとぼりが冷めるまでは俺が守ってやるよ」

どれだけ遠い地域でも、一つの会社を潰したのでは当然ニュースになる。その会社がどんなことをしていたかを世間に知られるのは時間の問題。そこに、自分の意思でなくても、働いていた者は当然罰が下されるからだ。

ジャックはそのことが心配で心配でしかたがなかった。

「すみません…迷惑をかけてしまって…」

クラウチは少し笑みを浮かべながらジャックに近寄り、ジャックより低い視線にまでしゃがみ頭を優しく撫でた。

「バカヤロウ、ガキが親に迷惑かけるのは当然であってテメーらガキの義務つてもんだ嫌となるくらい迷惑かけてこいよ。もうお前らはここに来てから。俺の家族だ。」

優しく笑い掛けられたジャックは我慢していた物が崩壊した

「すみません…すみません…」

大粒の涙をながしながら謝った。正確には何を言っているかわからず、ただ謝らないといけないと思ったから、ジャックは謝った。

アギロの死後から、姉、のようなりカルダはいたが、父、という者はいなかった。

その場で父にならないといけないシゼーレは、優しいの正反対のことをして、十分に父、という存在を味わえなかったのだ

(…まるで別人だ。戦場でのジャックは頼りがいのある隊長として見えるのに。いまとなっちゃただの泣き虫のガキじゃねえか)

元々、誰か人を引っ張っていく性格ではなかったジャックだったが、隊長、だったので下の者。つまり3人を守らないといけないという、

責任感から。自分を殺し。気高く上に立とうとしていたのだ

だが今では父、というクラウチの存在があり、押し殺してきた自分が出てきて。この有様。

クラウチは無言でジャックを抱きしめ。泣き止むまでその状態を続けた。

お父さんっていう存在…あのときから一番欲しかった存在。暖かい…凍えるように寒かったあそこよりも。とつても暖かい…

「で？なにしてたんだよお前」

「なにして、テレビ見てるだけだけど。あーキンググよかったらそこのお菓子とってくんない？」

「あ？これか？はいどーぞってんなわがあるかあああー！！」

盛大なノリツッコミ。思いっきり地面に叩きつけたので、ポテトチップスが粉々になった

「あーあ、なにしてくれんのさ。おと…クラウドがせっかくくれたのよ」

「そんなことどーでもいいんだよ。重要なのはなんでここにお前が  
いるかってことだよ！」

ここはキングの部屋キングがシャワーから上がったらテレビを見て  
いるジャックの姿があったのだ

「いーじゃん、他にいくとこがないんだよっね？お願いっ」

両手を顔の前で合わせるジャック。キングはぐぬぬぬぬといって分  
かったよと小さな声でいった

「やったー、さすがキング、話がわかるねえ」

椅子のでくるくる回るジャック。本当に、いままでのジャックとは比べ物にならないくらい楽しそうだった

「どういくの？」

粉々になったポテチを食べながらジャックが言う。

「散歩！」

「ほんとに散歩が好きなの、じいちゃんか？」

「うっせい！ー！行ってきます！ー！」

「ほーい、行ってらっしゃーい」

テレビを見ながらジャックは手を振った。

「お前か？俺の部屋にジャックをよこしたのは？」

いまキングはカフェに来ていた。クラウチに『ちょっとこい』とい  
って呼び出したのだ

「いや、ジャック自らだよ、まそれを拒みも進めもしなかったがな」

クラウチは酒を飲んでいた。ここに帰ってきて。色々していたらもう夜になっていたので

キングはそうかと言って窓を見た

「泣いてやがったよ」

その言葉に反応し、窓を見ていたキングがクラウチにゆっくり顔を向けた。

「すみません、すみませんって。まあそれ以外に言葉が見つからなかったんだろっよ」

キングはなにも話さず、ただクラウチの話をひたすら聞いていた

「まったく、まだガキだったのに、苦労してやがらあ。俺だったら完全に心折れてるね」

フツと軽く笑い、酒を飲む

「あいつは…ほんとに昔っから苦労ばかりしてやがる…生まれてま  
ず母親が死んじまって、5才くらいで親父をなくして…いままで冷  
たいところに暮らして…」

再びキングは窓の外を眺めた

「あいつは…逃げてなんかいなかったんだよな…ずっと一人で抱え  
て、耐えてやがったんだよな」

「その分、これからいっぱい幸せをあげりゃいいさ、いままでの苦  
しみを消すくらい笑顔をあげりゃいいさ。俺等ができんのはそれ  
くらいだ」

そつだなといってキングは席を立った

「同じ部屋にしてくれて…ありがとうよ」

クラウチは酒を飲みながら手を上げて会釈をする

部屋に帰るとジャックは寝ていた。緊張も何も無いここだから安心して寝ていられているのだろうか。いい笑顔をして寝ている。

キングも寝巻きに着替え同じベットに入った。

「おかえりジャック…これからは絶対どこにも行かせないからな。お休み…」

そういつてキングは眠りに着いた

ただいま…キング…



**運命と共に生きる暗殺者〜その後〜（後書き）**

はい、これが本当のENDじゃね！？みたいになりました。

なにかあどばいすとかあったら感想ほしいです

母

「たーだいまっ」と

「なんじゃその食料の多さは」

ジャックがナノトランサーから大量の食料をドサドサと出してきた。本来、ナノトランサーは。武器などを置いておく物で、決して食料を入れるものではない。とゆうか、フォトン以外の物を入れれば反応を起して灰になってしま  
うはず

『うーん、ナノトランサー…便利だけど、もっと日常で使える物に  
しないとね』

そういつてジャックは勝手に改造をしていたのだ。

「なあジャック、これ…なに？」

「冷蔵庫」

「そりゃ分かってるけどよ、なんでここにあるんだよ、まえまで無かったのに…」

「そりゃ買ったに決まってるだろー。うん、まだまだ貯金は山ほど…貯めこんでるなあキング」

通帳をまじまじと見つめるジャック。今の時代でも、通帳は紙なの

だ。

「俺の金かよ!！」

「いいじゃん、全然使ってないみたいだし」

ニシシと笑うジャック。そこに、ジャックの通信機器がなった。

「…あ、届きました?じゃあ送ってもらえます?…はい…はい。じやあよろしく願います」

「なんの話なんだ?」

ん?とニヤけながら返したジャック。まあ見てると言っただけ。置くに  
行った。そこには椅子が二つと小さな机が一つ。のんびりお茶でも

飲むのに最適だったはずのそれらがなかった。

「ジョーして、んで、ジョーだな」

よし、オツケイといってそこから少し離れた。

少ししてから映像のような物が浮かび出し、それが立体となり、一つの家具となった

「ほれ、キッチンに、台所が出来た」

むふふと自慢げに笑うジャック。相変わらずキングは何が起きているか分かっていなかった

「ちゃんと栄養取ってるか？キング。最近カフェで済ませてる姿をよくみるぞ？」

そりやお前もだろがと軽く突っ込むキング。

「ま、これから朝昼晩と飯つくってやるよ。ここに居させてもぶってるからそれくらいはしないと」

「へーへ、まあよろしく頼むわ」

そういってキングは部屋を出て行った。

「はいバスケット集合っ」

「俺はお前のなんなんだ？全く……」

カフェでくつろいでいたら、たまたまバスケットがいたので呼び出したのだ

「ジャックが今さっきしたことを説明してもらおうか」

「そこに俺は居なかったから何が起きたのか分からんのだが？」

「いや俺も実はよくわっかんねーんだよだからお前に聞いたんだろーが」

コイツ…

頭を悩ませるバスク。うーんといいながら口を開いた。

「じゃあ目の前でどんなことが起きたか教えてくれ」

「えーっと、ジャックがゴチャゴチャしてたらビビビって絵が出てきてそれからドーンってキッチンが出てきちゃった」

フォトン硬化による物質出力か…

あの擬音ばかりの説明で分かったらしい

「たしかキングは新入りのジャックと共に生活してるんだよね？」

ああそうだけどと頭を立てに振るキング。

「…じゃあそういつ事はジャックに任せておけ」

「なんでだよっ！」

バンと机を叩くキング。バスクはほをかきながら言った

「あの操作はキングには無理だ、なんせ無知には…」

「どづいゆこったぐらあああああ！」

「ぶぐらあああ…！」

「バスクのやるーが…」

まるでやくざの様な歩き方をしているキング。自分にジャックがしていることが出来ないのがとても悔しいらしい

とぼとぼと居住区を歩くキング。そろそろ部屋に帰ろうとしていたのだ

「……あつれ〜？」

ドアを開けると見知らぬ部屋に来ていたようだ。部屋を間違えたら  
しい。

そこにはエミリアが寝ていた

「…間違えたか、スマネ」

そう言って帰ろうとしたとき

………また眩しい？

目では眩しくないが。肌が眩しいといったら言いのだろうか。とに  
かく眩しいのだ

『…あなたは…』

その声はエミリアの声ではなく、母のように優しい声でした

『私が…見えるのですか？』

「いいや…見えない」

声は確かに聞こえるのだが、姿は見えない、しかしそこにはかすかに、眩しい気配があった

『…不思議ですね…私が見えないのに声は聞こえるなんて…』

「全くだ」

『あ…言い忘れていたのですが…この子を助けていただき有難うございました。』

「え？…ああレリクスの時のことか。アンタ、見てたのか？」

『いつも見守っています…ここから。キングさんはいつもこの子を守ってくれていますね』

「た…たまたまだ」

実際にキング自身も守っている自覚は無かった。ただ前で暴れていたら、後ろには被害が及ばず。守っている形になったのだ。

『ふふふ…面白い方ですね、いつも見ていましたが直接話すと…』

「バスクみたいにゆーな」

ホッペをかきながら言うキング。初めて会った時も似たようなことを言われたのがまだ忘れられなかった

『あ、申し遅れました、私、ミカといいます。』

「俺はーっでもう知ってんのか。まっヨロシク」

はい、と優しく笑みをかけたミカ。キングはその姿は見えなくても、優しさを感じ取れた。

「んー…」

『あ、この子が起きそうですね、そろそろ…』

「……………なにしてんの？」

起きた…

きつとミカは笑ってやがるだろうとキングは思った

「ねえここ私の部屋だよ？なにしてるのってきいてるの」

目を開けるとキングが壁にもたれ掛かっていたのだがからそう問いかけるのも仕方が無い。

必死にイイワケを考えるキング

「しよ……」

何かを言い出したキング。その顔は笑いながらも引きつっていた。

「しよゆないかと思って……」

「しよゆ!?!?」

「アタシ基本カフェだから無いよ!」

「そ…そうか、わり、迷惑かけたな…じゃ」

キングの背後からなぜか笑い声が聞こえたような気がした。

…ミカ…なんで声しか聞こえない？しかもなんでエミリアがいない  
とあのミカの眩しさは感じられない？

疑問に思いながらキングは部屋に行った

「なあクラウチ、しょうゆあるか？」

母（後書き）

終わらせ方ハンパねーなんて思いました

なんか無理やり終わらせたみたいな…

かんそうくださいー！！！！

## 訪問者

ドンッ！

「いったあゝちょっと！どこ見て歩いてんのよ！」

今、エミリアは宇宙ステーションでショッピング中だった。荷物であまり前が見えずに歩いていたので一人の男性とぶつかってしまい。荷物がドカドカと落ちていき、今に繋がる。

「おお、すまんかったなあ」

そういって手を差し伸べて立たせてくれた。

結構なまった発音をする男性。恐らく『関西』のヒューマンだと思われる。

「怪我はあらへんか？…うん…うん」

体全体を見渡しながらうんうんと頷く男。

「おお、大丈夫や。」

パンッと手を叩いて怪我が無かったことう確認し終えた。

「ほい、荷物」

「あ、ありがとう…」

男は荷物をトントンと積み重ねて手渡してくれた

「しかしこのまんまやと、またわしの二の舞になるで…」

あごを触りながらキセルをふかしていた。

「あ、せや、ちょっとちょっとその人。すまんけどなあ。この嬢ちゃんの荷物、半分持ったってくれへんか？あぶのーてあぶのーてしやーないわ」

手招きをしながら男が自分から近づいて通行人に頼んだ。その人もちよつと戸惑いながら、了承してくれた。

「すまんかったな、まっこれで事故起すこともあらへんやろつて」

エミリアに近づいてポンと頭を優しく叩いた。

「ほなな、きいつけや」

ふりむかずに手を振ってどこかに消えていった

「どうもすいませんでした」

荷物を運んでくれた人に丁寧にお礼を言って荷物を受けつとた

「あの人、変わってますね。なんかこう…上手く表現できませんが…」

頭の中では分かっているのに口で表現できなくて苦しむ男性

「ははは、たしかにそうでしたね…」

ほんとに変わった人だった…てかまず、話し方が独特だったし…

「あ！すいません！私急ぎなんでこれで…」

何かを思い出したかのように慌てる男性。でわと言って急いでどこかに消えた。それと同時に一人の男がリトルウイングに入ってきた。

「いんにちわ〜」

なまりのある話し方…キセルを片手にのりくらりと歩く姿…間違いないさっきの人だ

「こんにちは…って自分さっきの嬢ちゃんやないかいな！こんなところでもないしたんや！？迷子か？」

目を開いて驚くように質問してきた。確かにここは軍事会社。そんなところに少女がいるともおもわなかったようだ

「あ…ここアタシの家なの」

「あらら〜こんなあぶなっかしいトコロに住んどんかいな、えらいこつちやお」

へえ〜とキセルをふかしながら頷く男。そやそやといってここに来た理由を思い出して問いかけた

「じゃあ嬢ちゃん、ここに『クラウド』　っちゅうオッサンしらんか？　こう…イカツイ顔しとるオッサンや」

イカツくはないけど確かに居る。なんせクラウドはエミリアの親なのだから。

「あそこにいると思っつよ」

そういつてエミリアは事務所を指差した

「おお、あそこかいな、迷惑かけたな、おおきに」

肩に手をおいて事務所のほうに男は向かった

「へへへ、流石、キングって所だな。このクエストを成功させてくるたあよ」

画面を見ながらニヤニヤするクラウドと報酬袋を見つめるキングが居た

「…なあクラウド。なんでこんなに少ないんだよ」

中には10000メセタがあった

「結構難しいクエストだったんだろ？なんでこれだけなんだよ」

「ズル休みしたからだ」

「まだいつてんのかよ!!」

なんでだよと突っ込むキング。そんなことも無視して画面をニヤツきながら見ていた

「…?なにみてんだよ?」

のぞみ込もうとしたら、慌てて消された。

「ちょっと…バカ!勝手に見ようとしてるんじゃないやねえ!」

慌てるクラウチ。んだよケチーとブーブー文句を垂れるキング。

そんなやりとりをしていたらプシューとドアの開く音がした。二人はまだ気づいていない。

「こんにちはわぁ〜！」

なまりのある挨拶をしながら事務所にはいった男。

「んだようつせえなあ、ちったあ静かに…」

大きな声に気がついたクラウチは、言葉を途中で切り。その男を見つめた

「おまつ…」

「おつ。よやく見つけたでほんまに。久しぶりやおつオツチャン」

なにが起きているのかわかっていないキング。二人はそんなことも気にせずに話しをしていた

「お前どうしたんだよ急に、来るなら連絡くれえ入れてくれたらよかったのによお」

「いや、スマンスマン、ケータイ途中で池に落としてもうてなあ、連絡とろうにも取れへんかったんや」

あははと頭に手をやりながら話していた。

「しっかし、オツチャン変わったのぉ。アン時とは比べモンにはならへんでホンマに、ちよつと疑ったモン。これホンマにおっちゃんか？つてな」

「これっていうな！これって」

はははと二人は陽気に話していた。



子ども扱いされるのが一番嫌なキング。もちろん、額に血管を浮かべてエースに殴りかかった

ベシッ！

その拳は見事に防がれた。しかもキセル一本で。まるでやわらかい物を殴ったかのように力を吸収されたのをキングは感じた

「暴力はあかんで暴力は、世の中へーわに生きていかな、身がもたんで」

はははと笑いながら男は立った。キングは殴った体制から動けずになっていた

「…？どうしたんや？まさか怪我でもしたか？僕」

「誰がボクだコノヤロー!!」

殴った体制のまま反抗した。男は相変わらずへらへらしていた

「ところでお前、仕事はどつよ、順調か？」

んー？と言って体をクラウチのほうに向けた。

「あー仕事な、あれならもつやめたわ」

「なに!?!」

驚くクラウチに対してエースハハハと笑っていた。

「なんでやめたんだよ…?」

「もーあんな暴力集団のトコにはいてられへんはホンマに、最近の警察の行動はアカンで。

へーキで銃殺とかしとるやんけ。コワーてこわーてやってられへんわな」

最近の警察は、事件があればほとんどの場合犯人をその場で殺害してしまう。被害者の身に何かあったらいけないという判断なのだが、エースはそのやり方が気に入らぬらしい。

「ワシはイラン事したアホにも、やり直すチャンスはいくらでもあると思うねん、そいつを後押し。応援して、もっかい世の中出すのが警察の役目やおもとる。せやのに今の警察はなんや」

警察の愚痴をペラペラと話しているエース

「わ…分かったから、その話はまた今度聞こう」

長話になると悟ったクラウチは、早めに話を切った。こういう事が前にもあったのだろうか？

「…で？これからどうすもりなんだ？」

「そら決まってるやろつて。ここで働かせてえな」

「…べつにいいんだがよ、部屋がないんだよな…」

今、部屋が満タンな事に頭を悩ませているクラウチ。

「そんなもん近くのモーターでも泊まったらしまいや、部屋なら心配せんでええ」

それになど話を続けた

「ワシはワシのやり方で、イラン事やりよったアホを公正させるんや、警察なんて硬い肩書きに縛られんと。一人のワシとして。」

じゃあヨロシユウにと言っでどこかに消えていったエース

「ホント昔っから勝手な野郎だぜ」

ハアとため息をつきながらもなぜか笑っていたクラウチ。

「あした、皆に紹介しねえとな」

そういつてクラウチもどこかに行こうとした

「おーいクラウチ、報酬の県。忘れたとはいわせねえぞ。すくなすぎっていつてんだろーが」

クラウチはギクツと体をびくつかせ、少し時間を置いてから。ピュ  
ーとどこかに逃げていった。

訪問者（後書き）

エースってなまえ。皆さんも知ってのとつりのあのアニメ。  
あれから取ったわけじゃありませんから。

トランプから取ったわけですから

だからあのアニメのファンさん

どうか俺を殺さないでくださいーい（汗

## パートナー

「え、今日からここで働かしてもらおうエース・アルバトルちゅうモンです、出身は関西。まあ日本の生まれですわ。かたぐるしいのは苦手やさかい、気軽に話しかけてください」

話し方に特徴のある口調で陽気に自己紹介をするエース。

大勢の前で、あははと笑いながら自分の間合いを取っているのだからなかなか度胸はある様子。

「日本ってなに？」

手を上げながら大きな声で質問したのはキングだった

「なんや自分日本知らんのかいな！？そらえらいこつちゃでホンマに。今度連れてったるわ。日本はええぞそのなかでも大阪はなあ……」

「わーっだから！自分の故郷の自慢話はいい！」

この話は長くなることをクラウチはしっていたので。話をやめさせた

「あーとにかくだ！コイツはもうここの社員だから、ウチの家族だから。みんな仲良くするように！  
以上解散！散れ散れ！」

テメーが呼んだんだろーがとキングが吐きながらみんな消えていった

「おーっとエミリア。ドサクサにまぎれて逃げようなんてかんがえ

ねえこつたな。こつちにこい！」

ギクつとエミリアの動きが止まる。渋々クラウチの元に向かうエミリアをみてエースは笑いながら言った。

「なんやオツチャン。まだ説教癖なおつとらんのかいな」

キセルに火をつけながら言った

「やかましい。コイツがくだらねー事しやがるからだ。しかるのは当たり前だろ」

「にしてはやりすぎぢやうか？」

ふーっと煙を吹き。エミリアに近づいた。

「この嬢ちゃんのみみてみいや、これまで散々怒鳴られまくって病  
んっどる目やないか」

のうっど。同意を求めるようにエミリアに視線をやった。エミリア  
はどういって言いか分からずキョロキョロしていた

「ほぐれ見てみい、なんか言ったら怒られそうやーみたいな顔しと  
るはな。」

「わしの顔に免じて、今日は許したり」

パンつと両手を合わせてニシシと笑顔で頼んだ。以外にもクラウチ  
はそれを素直に受け入れた

「ワシにかかればオツチャンはいちころや」

そういつてハハハと笑いながらリトルウイングを出た。

その後。エミリアがエースになつたのは言うまでも無い。

「おっちゃん！」

「ん？なんや嬢ちゃんか。どないした？」

あれから2日が経ち、もう溶け込んだエースは。カフェでキセルをふかしながら新聞を読んでいた。そこに駆け足でエミリアが来たのだ。

「ねえねえ。このぬいぐるみどう思った？」

「ほーなかなかカワイイパンダやあらへんかいな」

「熊だし!！」

あははといってぬいぐるみを触るエース。

大人の男性に関わったとすれば今はクラウチくらい。そのクラウチはとても厳しく。エースのような

のん気な性格ではなかったので、エースのような優しい大人に触れたのが初めてのエミリア。

いままで、ぬいぐるみなどクラウチには見せなかったのだが。エースにはすぐに見せれた。

エースにはクラウチにない何かを持っていた

「エ…エミリアの野郎…俺にはあんなモン見せないくせに…ぐぐぐ…」

離れた席から新聞越しに二人を見るクラウチといつものように茶を飲んでいるチロが居た。

クラウチの手はプルプルと震えていて、いまにも破きそうだった

「クラウチさん嫉妬ですか？親父の嫉妬ほど見苦しい物はありませんよ？」

ギクッと苦笑いをするクラウチ。それをみてニタァ〜と憎たらしい顔をするチロ

「ベ…別に嫉妬なんざしてねえけどな？ただこの記事が気に食わなかったただだからな？」

はいはいと言いつつ、訳をするクラウチを見てチロは楽しんでた。

でも…あいつに寝てんだったら…

「おう、二人とも、来たか」

あれから次の日の朝に、エミリアとエースを呼び出した

「なんやなんやオツチャン。ワシが朝弱いんしつとるやろ？」

あくびをかきながら入ってくるエースと。半分寝ているエミリア。いつもなら怒鳴るクラウチも今日は我慢した

が…我慢だ…こんぐらいで怒鳴っちゃいけない…やりすぎなところ  
が俺にはあるんだからよ…  
あー！！思いっきり怒鳴りてー！！

うおー！と頭をかき回すクラウチ。いつもは見せない姿を見たエミリアは嫌な予感がしてシャキツとした

「おいオツチャンそんなにかき回したらハゲルで？」

流石にエースも心配をしたのか声をかけてようやくクラウチの動きが止まった

「ああ…そうだった。こんなことするためにお前たちを呼んだわけじゃねえからな」

ゴホンっと一息入れて話始めた。

「おまえら、パートナー作ったらどうだよ」

「パートナーかいな。せやけど誰と組めばええんや？もうほとんど決まってる、あいてるやつおれへんのとちやうか？」

少しボケた顔で言ったエース。まだ眠気が取れていないようだった

「じゃあなんのために二人を呼んだでしょうか？」

怒りマークをつけながら強い口調で強調したクラウチ。

二人は顔を合わせてあーっと。ポンと手を叩いた

「エミリアにはパートナーがいねえ、俺がパートナーになるわけにもいかんし、ずっと一人身だったが  
おまえが入ってきて、しかも結構お前に懐いてるようだし！おまえにつけることにした！」

なんでそこ強調すんねん？

ハテと一瞬思ったがすぐに分かったエースはにやりとした

「なんやオツチャン、嫉妬でもしとんかいな？」

あははははと笑うエース。勿論凶星。汗がタラタラ出てくるのでエースは確信した

まだエミリアは理解していなかったようだった

「だー！！とにかくっ！お前たちはパートナーだから！仲良くする

「ように！以上！帰れ！」

「また都合わるーなったら話しきる。昔からの悪い癖やおく」

ニイっとわらうエース。完全に遊ばれているのをクラウチは感じ取った

いこかといってエースは、エミリアを手招きしたエミリアはなにやらクラウチが気になる様子。

二人が出て行き、少し静かな空間になった。

「クラウチさん」

そういつて静かな空間に入ってきたのはジャックだった。

おはようございますと言って、ペコリと頭を下げ、クラウチに近寄った。

「あの、食料がそろそろ切れそうなんで買出しについてきていただけませんか？」

クラウチの目がウルウルしているのをジャックは気づかず、話を続けた

「キングの野郎…一回に食い過ぎなんだよ…そんなに食べても身長なんか伸びないっての。ねえクラウ…」

話を聞かずにクラウチがジャックに抱きついた

「そー言って俺によってきてくれんのはお前だけだよおおおおお」

「ちょ…クラウチさん!？」

驚くジャックを気にせず、ひたすらほづりしたクラウチ。

しばしなそこでジャックはされるがままになった

カーシュ族・上（前書き）

すみません！予定日を間違えていたことに今気づきました

ほんとすみません！

## カーシュ族・上

「なんでアタシ達が人探しなんか行かないといけないのよー！」

「まあそうグチたれんとき、家でゴロゴロしてるの見かねて、簡単なミッションをやらせようっちゅうオツチャンの愛やがな」

事務所から二人が出てきて、エミリアは出てきた瞬間グチをもらっていた。

どうやら人探しを頼まれたらしい

「いや…オッサンに限ってそんな事は絶対はない！ただ面倒事をアタシ達押し付けてるだけだよ」

ふーん…とりあえず、一つ原因見つけたわ

エースがハハーンと一人で納得した。その内容はクラウチとエミリアの仲の話。あまりにも仲が悪過ぎるのでなぜかを探っていたのだが答えが簡単なところにあった。

信頼してへん…オッサンの事を信頼してへんのや

こいつはエライコッチャとデコをペンっと叩いて言った

「どつしたのおじちゃん？」

一人でさつきから色々しているので少々不安になったエミリアがエースに声をかけた

「あーわるいわるい、なんでもあらへんのや、さあ行こかいな」

悟られないように話をそらして人探しに二人は向かった

「…で？俺になにか用か？」

「ああ、実は人探しをしてもらいたい」

二人が出かけた後、クラウチがキングを事務所に呼び出した。

クラウチは写真を見せながら説明をした

「こいつはワレリー・ココフ。俺の古い仲のやつだ。こいつに貸した金を要求してくれねえか？」

「…あれ？コイツ…エミリアたちが探しに行った奴じゃねえか？」

ギク…

「あー…その通りだよ…頼むっ理由はきかねえでくれ！報酬は弾むからよ」

両手を合わせてキングにたのんだ。キングは報酬が増えるので了承し、なにも聞かずに人探しを受けた

「えっとだな人探しって行っても列記としたミッションだ。パーティでも組んでいってくりゃ楽なんじゃね？」

「パーティー？」

「やっぱりそうくるかなと少し思ったクラウチの勘が当たった。」

「えっとだな。簡単に言うと仕事にお前含めて4人までそのミッションに同行できるんだよ。だからジャックとか誘ってみたらどうだ？」

「あーじゃあそうすつかと行ってジャックを誘いにキングは事務所を出た」

「はあー…あいつが心配だから。なんていえねえよな…」

クラウドはため息をついてパソコンを立ち上げた

「で？分け前は貰えるのか？」

「あ、俺はべつにいや。その代わりなんか帰り道でお菓子かえよ？」

今はシツプの中。分け前を要求してきたのはバスクとジャックだった。ジャックはお菓子で交渉成立  
バスクはしっかり分け前を貰うつもりでいるようだ

「え？あげなきゃ駄目か？」

「駄目に決まってるだろ」

冷たくツツコムバスク

「いいじゃねえかお前を帰りにお菓子買ってやるからよお。大体おめーは運転くらいしかしないだろうが」

「じゃあこのままクラッド6に帰ってもいいんだぞ」

「う…」

わーったよ！とあきらめてキングは了承した。バスクは嬉しそうでした

「で、エミリアを追えばいいのか？」

「あー違うんだと。エミリアたちの人探しはただの名目で奴等はただの腕ためしに出かけたくらいだつてよ。まあ奴等はその気で見ただけ」

「じぁあこつちが本命か」

ああとキングが頷いた。

「モトウブウか、あんなトコにいるのかな？しかもいる場所がある場所でしょ？」

ジャックがフォトンで出来た地図を指差しながら言った。

そこには原生生物がうようよしている所。そんなところになんでワレリーがいるのかと疑問に思ったのだ

「気に入るトコじゃあねえ、どーせ暇なんだよ暇。」

それは違つだろとジャック、バスクは同じ事を心の中で思った。

「んで、ここがそうか」

「まあそうみたいだな全く、ここらへんは空港がないから大変だな」

ほとんど自然のままなので空港などほとんどなかった

「うーん…」

キングがなにやら違和感を感じているようだ

「おかしい…人の気配はする…でも生きてやがんのか？自分で動いてる感じがしない」

どうやら人の気配を感じ取ったらしい

「ったく。いいよなあキングは、気配とか感じ取れてさ」

え？つとバスクが驚いた

「ビーストは気配を感じ取れるんじゃないのか？」

「さあね、よく知らないけど。俺が見た限りそんな事が出来るのはこいつくらいだよ」

いいなあと指をくわえながらキングを見るジャック。

いつからだろうか、キングという存在を不思議に思ったのは

「おい、お前から置いていくぞー」

「ああ、いまそっちに行く」

3人はキングを先頭に歩き出した

カーシュ族・下（前書き）

今回はエース・エミリアのところから始まります。

カーシュ族・下

「うっ…」

「あゝあ坊っちゃんが気絶もつたで、だから暴力はイカンゆうとんのに」

ついさつき一人の少年がいきなり襲い掛かってきたのだ。こちらはエース、エミリア。それから途中で出会ったトニオとリーナというビーストの夫婦がいたので簡単に倒せた。

「よく言つわよ！一番暴力振つてたのはオジちゃんでしょ！？」

『いきなり挨拶もせんと暴力とわナツテへんのお！出会つたら最初はこんにちわやるがボケエエ！！』

そういつて襲い掛かってきた少年の後頭部をつかみ。おもいつきり地面に叩きつけて気絶させたのだ

「あれ？ワシ暴力振つたっけ？」

キセルに火をつけながらエースが言った。

「すげえなアンタ。元傭兵か？」

トニオが驚きながら聞いた。

「いやいや、もと警察や。穩健派のな」

フーツと煙を吐き。ニコツと笑顔で答えた

よくいうぜ…あれのどこが穩健派だよ…

まだエースの事をよく知らないトニオが。あんなシーンを見せられ  
たら穩健派とは思えないようだ

「とにかくこの子を手当てしないとね」

地面にめり込んだ少年をリーナがやっとの思いで引っこ抜き。応急処置をしていた

「うわぁー…思った以上に怪我が激しいなコリヤ…いったん船にもどって、ちゃんとした手当てをしないとね」

少年の怪我をまじまじとトニオが見つめた。一回の攻撃でノックアウトし、これだけの怪我をさせるエースを恐ろしい人間だとトニオは思ってしまった。

「え！？じゃあアタシ達二人だけで進まないといけないの!？」

「ま、そうゆう事だね」

「だ…大丈夫だって。そつちにはあの人がいるから俺等がいなくなつて…」

青醒めながらエースを見た。こちらに気づいたエースが笑顔で会釈をした

なんかものすごくこえええ…

まるで蛇に睨まれたカエルのように、トニオはそこから動けなかった。

「トニオなにしてんの！はやくいくよ！」

リーナの声でようやくなにかに開放されたようにトニオはリーナのもとへ走っていった

勿論だが、エースはそんな睨んだつもりは無い

「さーて、わし等も先進もか」

「なあキング」

「なんだよ」

「どこくるの…何回目だ？」

「100回目くらいか？」

いまキングたちは道に迷っていた。気配がする方向にキングは進んでいたのだが。何かに阻まれるかのように気配が消えてしまい。同じ道をぐるぐる回っていた。

「頼むぞほんとに…お前しかワレリーがどこにいるのか分からないの

だぞ？」

「あーこつちだ！」

木の枝を上にはり投げ、枝の先を指差すキング。もう半分あきらめている様子。

「はなし…聞いているのか…？」

キングを先頭にジャックもそれについていく。なぜジャックは文句を言わないのかを不思議に思った

「ん？」

ジャックが何かを見つけたようで、残る二人もジャックのもとに走った。

「なんだこりゃ？」

「カーシュ族の残した道しるべだな」

バスクが指差す先には、たしかに文字が書いてあった。

「ここは、俺のぼんだな」

そういつてバスクが何かを取り出し解読を始めた。

数分後。

「よし分かったぞ」

解読を終えたバスクが早速解読した文章を読み上げた

「400m先、右方向です」

「なんでカーナビみたいになっただの？」

ジャックが突っ込んだ。確かに説明のしかたがなぜかカーナビ風だった。

「世の中は発展したんだ、さー400m先、右方向に行こうぜー」

そんな事は気にせずキングは歩き出した。

「なんで疑問に思わなかったんだろっか…？」

バスはハアとため息をついてキングについていった

「…お。人がいるぞ」

あれから何個か道しるべがあつて。それにしたがって進んでいると  
5人くらいのひとが見えてきたのだ

「……？あれ？様子おかしくないか？」

なにか違和感を感じたバスク。向こう側の人たちがこっちに気づいた

「っ！！危ない！」

ジャックの声と同時に人たちが射撃してきた。三人は何とかそれをよけた

「ったく！いきなり撃ってくるたあどうゆう了見だ！」

そういつてキングは人たちに襲い掛かった

まず一番近かった二人の顔をわしづかみにし、もう一人奥にいた人

に向かってジャンプし、それと同時に右手でつかんだ人を壁に叩きつけジャンプしたまま奥の人を蹴った。最後に着地すると同時に左手につかんでいた人を地面にたたきつけた

「3人終了!あと2人!!」

「まったく」

すぐこれだと笑いながらため息をつくジャック。その後。残る2人も倒した

「お?コイツ…」

倒した一人の男をキングが見ていた

「おいジャック、ワレリーいたぞ！」

ほんとか！と言って二人はキングのもとにはいった

「うん、確かにこの人だ。バスクさん、クラウドさんに連絡を」

はいよと言ってバスクは通信機器を取り出した

「おい起きろー」

キングがワレリーを起すために。上にのしかかって往復ビンタをしていた。勿論ジャックは止めに入った

「おきねえな。このまま持って帰るか」

「まあそうするしかないみたいだね」

そういつてキングはワレリーを担ぎあげた

「ああ。確保したよ…うん、分かった今から帰るとしよう」

クラウチと連絡をし終えたバスクが、帰るぞと促した

「ちょっとまった！残った人たちも…」

あーそうだったとって三人で手分けして残る四人を担いだ

『あなたわ…!!』

あれ？いまミカの声がしたか？

なぜがミカの声がしたような気がしたキング。

気のせいかと思えばスクたちについていき、シップに戻った。



## 胸騒ぎ

「…じゃあ本当に記憶がねえのか？」

「ああ…気がついたらここにいて…それから妙に頭が割れるようにいたい…」

ついさつき、キング達がワレリーを抱えてクラウチのいる事務所に来た。後の2人は残る4人を手分けしてかついで来たようだ

「まあそんなに深く考える必要はねえよ。重要なのは。金かえせっ」

そういつてワレリーに向かって右手を差し出した。ワレリーは少し戸惑ったが、あっ！と思い出し、急いで財布を取りだし、お金を返した

「そうそうこれだよこれ、しっかり、貰ったからな」

「ちょっとまってーいっ！」

そう大きな声で叫んだのはキングだった。

「ん？どうしたキング」

「俺の報酬！その金全部でいいよ！」

勢いよく手を差し出した。クラウドは一つまみのメセタを渡した

「…あ？」

手渡されたのは20、000メセタ。勿論キングが納得する分けな  
かった

「なあ…奮発するとか言っただけ？」

「したじゃねえかいつもより10、000メセタ上乘せた」

ガハハハと笑うクラウチの顔に拳がめり込んだのは言っまでもない

…

クラウドの通信機がなった。

「チっ…出るよ」

クラウドは言われるがまま出た

『オツチャン。エミリア倒れてしもた』

通信越しにかすかに笑い声が聞こえる

『アンタなにのん気に笑ってるのよ！アンタのパートナーでしょ！』

聞いたことの無い怒鳴り声が聞こえた。

『アンタがクラウチだな？細かいことは今は言えねえからとにかく救急の準備をしておいてくれ』

次は男の声、どうやら通信を代わったらしい。

『すぐにそっちに行くから待ってる！』

プシン...

「.....」

一方的な通信で啞然としているクラウチ。

ドクン…ドクン…

誰も気がついていなかったが、このときキングが妙な胸騒ぎを起していた

なんだ…これ…懐かしい？

キングの胸が鳴り止まない。懐かしく、安心出来るような感じなのだがなぜかそこに恐怖を覚える感覚。

「なんだあ…？」

「ただいまオツチャン。」

そういつてのん気に事務所に来たのはエースだった。キング達は先に病院で待っているといつて出て行き、クラウチしかいなかった。キセルをくわえたままのエースがクラウチの近づく。

「今帰ったで」

「ああ…で？エミリアは？」

「いま病院連れてったわ。心配せんでええわ」

はっはっはと豪快に笑うエース。

はあとため息をつくクラウチだがその顔は笑っていた。

「…で、結論から言つと以上はありませんでした」

「んだよチクショウしんぱいして損したぜ」

「よく言つよ…怪我したってウキウキしてただろうが…」

ここはクラッド6にあるホスピタル地区。そこで、エミリアの診査結果をキング達が聞いていた

「まあ2・3日休めばよくなるでしょう。…ですがもう一人の少年は…」

少年とは、エースがコテンパンにしたカーシュ族の子だった

「だれそれ」

「後で話してやるよ」

あのときのことを思い出して言々めるトニオ。よほど恐ろしかったらしい。

「…？お前も誰？」

「あ〜」

「あ〜」

エミリアが寝ている個室に、クラウチが椅子に腰掛けた。

…外傷はねえのになんで気を失うんだ？疲れか？それとも違う病気か？

ああだこうだと考えていたらなんだか不安になってきたクラウチ。  
なにをしたらいいかわからず  
ただエミリアの顔をじっと見つめていた

あれ…そういやこんなにコイツの顔みただの初めてか？

なぜかこそばゆくなるクラウチ。それから勝手にエミリアの頭に手が伸びた

こいつの頭撫でたのも初めてか…こんなこといままでしてやれなかったが…

「エーミリア！げんきかぁ？お見舞いにたこやきもって…ん？」

最悪のタイミング。クラウドが一番見られなくなかったところを見られてしまった

「お邪魔しましたー。どうぞゆっくりー」

標準語でゆっくりと消えていくエース。その後クラウドは固まったまま何も出来なかった

「じゃあこれで商談は成立だな」

「ああ。だがいいのか？この商談。ほとんど貴様に利益は無いが？」

「いや十分だ。これだけの兵がいたら何でも出来る」

遠くを見る男に黒服の男がフツと笑った

「しかし貴様も変わった奴だ。そんな事をして、世界が変わると？」

「変えてやるさ。テーマで決めたことは死ぬまで通す。それが筋  
つてもんだ」

## 胸騒ぎ（後書き）

はい。まだ先になりますが、つぎの長編はいよいよこのタイトルの意味的な感じのに触れていきます。もうはなしは大体決まっていますのでー

昔話をしようか（前書き）

そろそろキングについて話していきましよう。っていつても。もうキングがなんなのかわかっちゃったって人がいるかもしれません。その場合は墓場までソレを持って行ってください

## 昔話をしようか

ここで少し前の昔話をしようか。

昔話の内容。それは約十年くらい前の話だろうか？小さな村の、大きな戦いだ。

384

私はその村を鎮圧するために派遣された軍…の裏方。つまり救護班とでも言っておくのがいいだろうか

この兵士長によると何度かここを攻めているが、一向に落す事が出来ないそうだ。だから私たちがここに来たという理由に繋がる。

私はその村の中にはどれだけの策士。豪傑。兵士がいるのかと想像してみた。

だがその想像は兵士長の次の言葉で打ち砕かれた。

『向こうの勢力は4人。これだけの兵がいれば安心だが、負傷者は多く出るだろう。よろしく頼むぞ』

四人…？

私は耳を疑った。ここの軍はなかなかの古株。戦闘経験も豊富で。兵士長の頭はなかなかキレる。

その軍が幾度と無く返り討ちにされているのだった

私はこの目でその4人を見るまで信じる事が出来なかった。

遠くから兵士長の怒鳴り声が聞こえる。どうやら戦いが始まったようだ。

私たちの班は急いで。救護の準備に入った。

まもなく、大きな音が聞こえた。

私は一度でいいから4人の姿を見てみたかったので、密かに伏兵がいる森の横辺りから彼等を見ることにした

驚いた…

一人の小さな男がもう兵士長のいる辺りまで切り込んでいた。その小さな男は自分の身長よりも遥かに長い太刀を見事に振り回していた

その後ろを見てみると大きな男2人と小さな子供？が一人いて、敵陣に切り込んでいた男が大雑把に倒して、まだ倒れていない私たちの兵を確実に倒していた。

私はその4人に見とれていると隣の伏兵部隊が動き出した。

するとその伏兵部隊は4人と逆の方向に向かった。

私にはその時、その行動に理解できなかったが、大柄の男が必死で伏兵達に追いつこうとしていた

なるほど…民を狙ったのか…

卑怯だが。効果は大きいだろう。肉体的ではなく、精神にダメージ

を与え、士気を下げる作戦。

愚策だが心を攻撃する心理攻撃には感服した。

その後。大きな音がして爆発が起きた。その爆発は大柄の男に命中した。

あの男はここのいわば將軍のような存在だと聞いた。

終わった。

間もなく、村人たちの声が聞こえた。むごいが、完全に敵の士気を挫くことが出来た。勝利は私たちの物だろう

でも…ここからは私はまるで悪夢でも見ていたかのような事が起きた

あの先頭を走っていた男。その男が兵士長の上にまたがっている。

それだけならまだよかった。この後のことが本当に恐ろしかった

小さな男の叫び声。鼓膜が破れるかと思った。

その時に私は何か切れる音がしたように思えた。鎖が切れる音だ

ろうか？もしかしたらそれは勘違いかも知れないが、そんなことは  
どうでもよく思えてしまうような光景が広がった

小さな男の姿が変わった。

天使：いやそんなモノではない。まるで天使のような羽が背中にあ  
った。しかしソレはカラスのように

深い黒色をしていて。彼の特徴である金髪が白色に変わっていた。

391

手は妖怪と言っているのか分からないが、そのような形をしており  
鋭い爪が生えていてその姿は

まさしく悪魔。

見た目どつりの戦いを彼はしていた。もう敵勢力で動いていたのは彼だけ。兵士長は無残に潰されていて。とにかく目に写るものは全て消してももの数分で壊滅させてしまった。

それから私はあることに気がついた。

死体が無いのだ。代わりにあつたのはカラスの羽、それが男の周りに舞っていた。

間もなく、救護班も壊滅されるだろう。私はこの事を軍に伝えるため。この場を離れた。

私は上の物に私が見たこと全てを話した。

その次の日。私たちは負けを認めた。

私はあの事を本に記しておき、後の世代まで伝えたいと思う。

そしてあの男のあの恐ろしい姿…それも明かしていきたいと思う



昔話をしようか（後書き）

スンマセンが今日からテスト1週間まえなんで1週間休ませていた  
だきたいと思います。どうもすいません<>

あいてる時間でちょっとづつストックできたらしておきます。

勧誘・上（前書き）

あーあテストなんてなくなってしまうばいいのに。  
結構遅れましたすいません・・・

実はこの小説の挿絵バージョンを造りました！  
作者が違いますがそこはきにしないで…

幻想を抱いた星達イラスト集

です

僕のページ開いてもらったら下のほうにあります。

ぜひ見ていただけたらなと思います

勧誘・上

『えー次のニュースです』

「なんやこの暗いニュースキャスターは」

「うつせえなバカ。誰でもかわりやしねえだろうが」

いつもの朝。いつもの事務所、いつものニュース番組。その繰り返しの生活をクラウチは今まででしていたのだが、エースが来てからもう一つの、いつもの。が加わった。

チャンネル争い。

朝が弱いエースなのだが最近はずいぶん朝早くにリトルウイングの顔を出し、クラウチのいる事務所に来る。

「アホわオツチャンのほうや。こんな暗いの朝から見られるかい、ハルちゃんのニュースにしてえーな」

最近エースは。人気ニュースキャスターのハルに夢中。それが目的でわざわざここまで来ているのだ  
ちなみにクラウチはハルが大嫌い。なので意地でもチャンネルを変えようとする。

「やめてくれ…あいつを見てたらなんかやる気が無くなる」



いつもの如く。ここでエースはノックアウト。

「いや、一番お前さんがうつさかったけどな」

なんども襲撃に会ってるので学習したクラウチはいち早く非難をしていた。

「これでようやく静かにテレビが見れる」

キングは利用されたのに今気づき、なぜか敗北感に打ちのめされていた

『最近。影で動いていた幻想教げんぞうきょうが、ついに表向きに動き出したようです』

「幻想教？」

クラウチがテレビにむかってつぶやいた

幻想教。最近出来た集団で。あまり表には出ていず、裏で密かに動いている集団。グラール教など。信仰目的の集団ではなく。世界を変える为名乗りを上げている集団だ。

その頭領は誰かは分かっていないが、その集団の9割がビーストと  
いうことで、人間達に不満を持った者だと思われる。

『頭領は、近日、この世界を潰しにかかる。と警察、ガーディアンズに脅迫状を送った模様で両者共に警戒をしている模様です』

「バカか…こいつ等のことをこんなトコで話してんじゃねえよ。グルール中がパニックになるわ」

「なんだよ幻想教って」

すこし落ち込んだようすでクラウチに近づくキング。キングは最近まで牢屋にいたので幻想教のことは知らなかった

「いうなりや、武装集団かな？この世界変えるために活動してんだとよ。でもいこいつ等の実力は半端なもんじゃねえぞ。ほとんどがビーストだから戦いにはめっぼう強い上そこにニューマンの頭がキれる奴が最近加わったらしく、今までよりかなり強い集団になってやがる」

「くわしいな」

「ああ。奴等、裏でこそそそしてる割に、活動を報告するかのよう  
に今みたいにニュースで報道させやがるんだよ」

話を聞き終わったキングはふうーんと一言。どうやらあまり興味が  
無いらしい。

「ところでクラウチ。免許。出来たか？」

キングの言う免許。それは船の免許マイシッブ。いつまでもバスクに迷惑かけ  
られないと、免許を取ったらしい

「ああ、届いてるぜ。ほらよ」

クラウチはキングに免許を手渡した

「じゃあ今日は休みを貰うぜ」

「別にわまわねえが。どこ行くんだ？」

「俺の村だ」

「久しぶりに帰ってこれたな」

10年ぶりの村。そこは今でもなぜか潰されずほっといたままの状態にあった。草木は生い茂り、村とはいえないくらいにまでなったが、いまでもいキングにとっては故郷。

「ん？」

キングが何かを見つけた。そこには多数の墓があった

「…みんなの墓か？」

「どうだ？ちゃんと皆の墓は作っておいた。これなら、みんな成仏できるかと思って。…いや。きつと悔しくて成仏できんかもしれない」

！！

背中に誰かの気配。しかもその気配はキングのすぐそこにあり、ナイフを突きつけられていた

懐かしく。そして大きな恐怖を覚えさせる気配。キングは顔が見えなくてもすぐに誰かがわかった

「…兄キ」

「よおキング。久しぶりだな。10年ぶりか？ちつともでかくなっちゃいねえな。」

キングの兄。そらはジャックと同じく、10年前の戦いで生き別れたロウの事

「なにすんだ、そのナイフ。降ろしてくれよ」

「コイツは用心だ。安心しろお前が襲ってこない限りこいつは使わ  
ん」

すこし間が空いてから、キングが問いかけた

「なんで俺がここにいるってわかった？」

ロウはフツと軽く笑い口を開いた

「お前の気配がした。とでも言っておいつか？」

「ケツ…」

いつもなら強気のキングが今日は動かずにいる。キングはいま震えているからだ。

「なあキング。俺は今日おまえに話があってここに来たんだ。」

「なんだよ…?」

なんとか震えをとめようと必死に頑張るキング。それを見て、ロウはナイフを捨てて話し出した

「お前はヒトを恨んでるか?」

「俺たちの生活を潰した奴等を。俺たちの仲間・家族を殺した奴等を。世界を潰した奴等を。お前は恨んでいるかを今ここで聞きたい」

正直キングは恨んでいる。しかしここ最近、ヒトの優しさに触れたキングはその気持ちがなくなりつつあった

「……………」

「悩んでいるか」

ロウは、すぐにキングの気持ちを見破った

「ヒトの優しさなどに触れ、ヒトに情を持っているのならそれは捨てる。奴等の優しさは所詮、皮を一枚剥けば無くなり、自分のことしか考えなくなる」

「考えても見る、奴等は自分のためだけに動物を殺しそれを食している。自分たちだけのために自然を潰してそれを自分たちのためだけに利用している。そして奴等は自分たちだけのために俺たちを作り、働かせ、苦しい思いを押し付けている。」

「いまじゃ表向き、人間は共に手を取り合って他の種族と歩んでいると言われているが裏はどうだ？」

「いまだに種族差別は無くならず俺たちビーストはまだ奴隷として扱われている。ニューマン。キャストもそうだ。裏じゃ人体実験にニューマンは使われている。奴等は新たな生命を誕生させると言っているがその誕生するまでにどれだけの命が無駄に消されているか」

「奴等中心の世界を潰す！奴等にこの星を、宇宙を任せてはいずれ滅ぶ！」

熱く語ったロウ、もの静かだったロウがここまで熱くなったのは  
キングもあまり見ない

親父…みんな…

忘れかけていた憎しみ。それがいまこみ上げてきた

「こつちにこいキング。まずは俺の目的一つ。それを成し遂げる。  
お前がいれば簡単だ」

キングは自分を見失っていた。色々な感情がこみ上げ、うなりをあ  
げている。

「やあ…」

「兄キ…」

「来るんだ!!」

「見つけたぞゴラアアアア!!」

誰かの叫び声と同時に大きな爆発音が聞こえた。キング・ロウに向かって撃たれたものだった

続く

勧誘・上（後書き）

なんか疲れました（汗  
テストおわるまで不定期的ですが多めにみてください…

勧誘・下(前書き)

もつすぐテストもおわり バンザイ／(ハ－ハ)ノ

勧誘・下

「あ…あぶねーだろーが！いきなりなにしやがんだ」

間一髪で避けたキングとロウ。

今の衝撃でキングはなんとか自分を取り戻した様子

煙が舞ってる中から大砲バスーカを担いだ男が現れた

「やかましい、幻想教頭領ロウ。てめえの首をこの地球支局局長ジ  
ヨーカ・トランプがもぎ取りに来た。大人しく死ねや」

いきなりとんでもない事を言った男は警察の者の様子。

タバコをくわえ、制服を だらし無く着る姿は警察とは思えなかった

「ほう…あの優秀な警察組織をただの暴力集団にかえた局長殿が直々におでましとわ」

「やかましいんだよ。俺達は悪事働く馬鹿野郎を地獄に落としてるだけだ。馬鹿は口でいつてもまた同じ事を繰り返して市民に迷惑をかけやがる」

「だったら二度とお天道様拝めねえようにして市民守るだけだ。」

てめえもその馬鹿野郎に入ってたんだぞと言った後に大砲を構えもう一度ロウに向かって砲弾を放った

「俺はこっちだ。熱くなると回りが見えなくなるタイプか？」

気付けばロウはジョーカの隣に立っていた

「ちっ…野郎」

「残念だがお前とあそんでる暇はないんでね。失礼する」

そついうと頭上に船が来た口ウは転送装置のようなボタンを押して消えた

「逃げやがったか」

ペツと唾を吐きタバコを捨てて、二本目のタバコに火をつけようとしたら  
キングがジョーカーに飛び蹴りをした

「っ！なにしゃがんだてめえ！」

「それはこっちの台詞だこの野郎！なにが市民守るだ思いつ切り俺殺すつもりだっただろーが」



もう一度ジョーカに殴りかかろうとしたら誰かに腕をつかまれた

「ごめんね、多分ウチの局長がなにかしでかしたんだろ？僕が謝っておくよ。さ、腕を下ろして？」

キングの手を腕をつかんだのは背の高い茶髪のビーストだった

「いや、アンタがつかんでるから降ろそうにも降ろせねえから…あ？」

手を離せと言おうとしたが、その男の顔を見て違う言葉が出てきた

「…お前。エミリアとレリクスにいた野郎か？」

「エミリア？レリクス？」

うーんとあごを触りながら記憶をたどる男

「あーもしかして僕を助けてくれた人？」

そうだよと一言キングが言つと男はキングの両手を掴み、ブンブン振った

「いやーありがとね本当に。僕一回自立起動兵器に切り裂かれたと思っただけと…そうか君が助けてくれたんだね。名前はなんていうの？」

「キ…キングだ」

いきなり手をブンブン上下に振り回されるものだからキングは少し戸惑っていた

「キング君だね、僕はアクセル。アクセル・サイド・ブレーキだよ。」

話の終わりを見計らって ジョーカがアクセルに話し掛けた

「アクセル、無駄な話はそこまでだ。幻想教の野郎は捕まえたか？」

「いや、そんな奴らは見当たらなかったよ」

そうかと残念そうにジョーカはつぶやいた。

アクセルがなにかを思い出したかのように人差し指を立てながら話  
だした

「あ、でも宗教関係の人には会ったよ。この世界を変えるとか言っ  
てる人とか。あと警察の事が気になるみたい。僕が警察だと分かっ  
たら慌ててどっか行っちゃったよ」

変わった人達だなあと笑っていたらジョーカが思いつ切りげんこつ  
を喰らわせた

「それ幻想教の奴らだろうがあああ!!」

大声でアクセルに怒ると あ、本当だと言って、ぼんとてを叩いた

「なに今気づいてんだよ!! 絶好の機会逃しやがって」

もう一度げんこつを喰らわせた後、ジョーカは携帯を取り出した

「こちらジョーカ、廃墟近くに幻想教の野郎がまだうろついているかも知れねえ。付近の奴らに知らせてしよっぴいてこい」

携帯を切り、俺達も行くぞとアクセルの耳を引っ張った

「ああそつだ、キングとか言ったな、お前にも来てもらおうか」

そういつてキングの耳も引っ張った

「ちよつてめえなにしゃがる! 離しやがれ! てめえ!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6274x/>

---

幻想を抱いた星達

2011年12月11日14時53分発行